平成23年11月26日
明日香村教育委員会

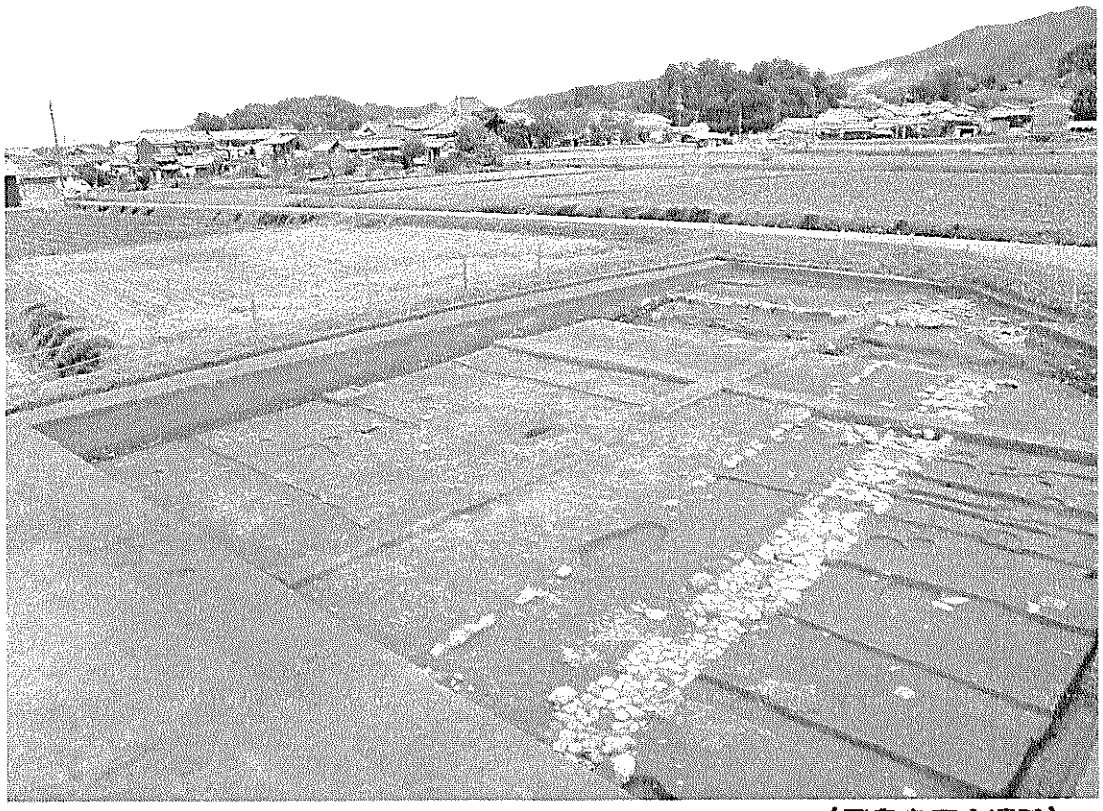
明日香村発掘調査報告会 2011

開　　会 1:00～

調査報告 1:10～

「飛鳥寺西方遺跡の調査」長谷川 透

「西飛鳥の最近の調査」　西光 慎治



（飛鳥寺西方遺跡）

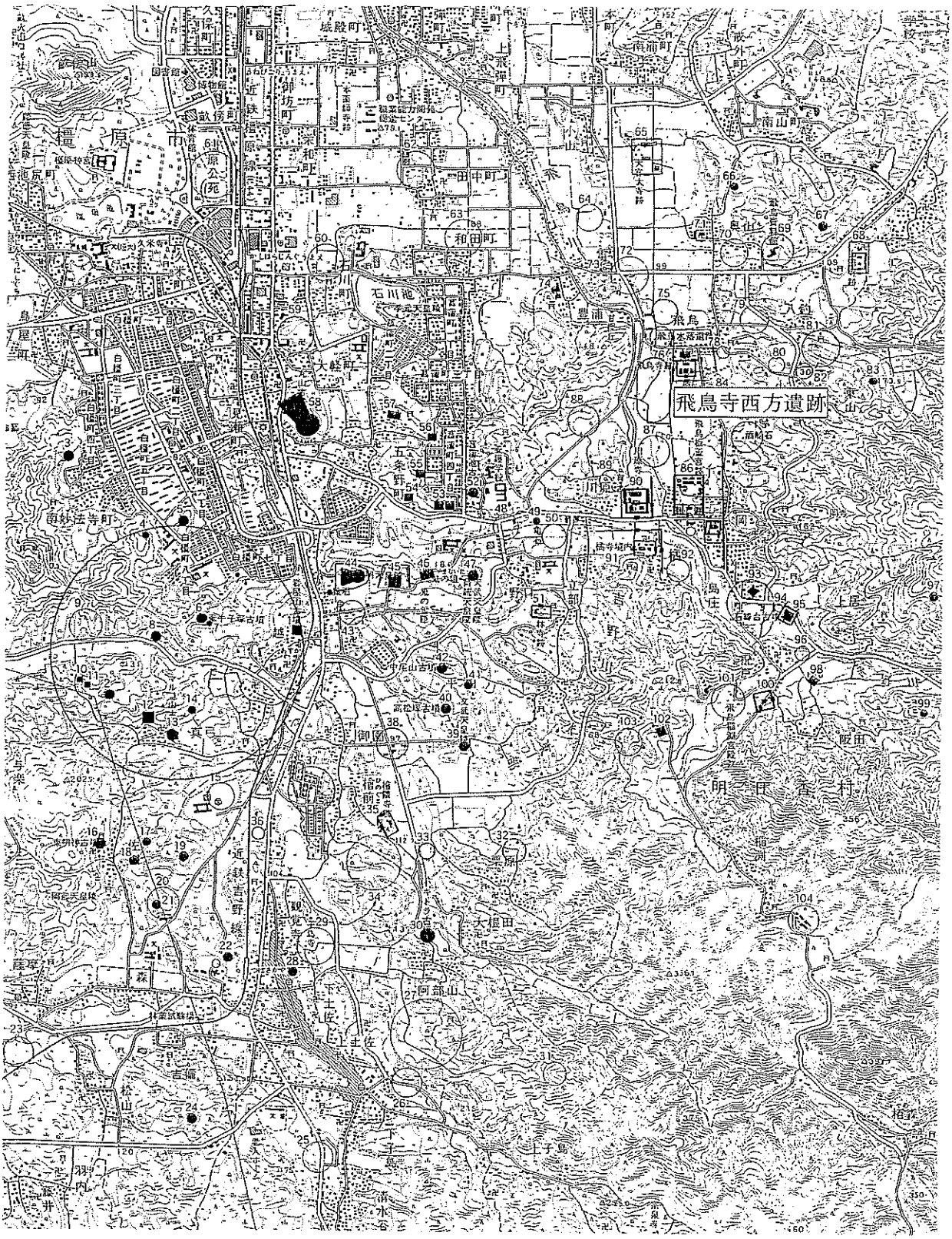
講　　演 3:00～

「飛鳥寺西の槻の広場―宮廷儀礼を探る」

講師 木下 正史 氏

明日香村文化財顧問

東京学芸大学名誉教授



1. 岩屋山古墳　2. 真弓ワダ古墳　3. 小谷古墳　4. 益田岩船　5. 沼山古墳　6. 栗牛子塚古墳　7. 越塚御門古墳　8. 真弓鑵子塚古墳　9. 与楽古墳群　10. スズミ１号墳　11. スズミ２号墳　12. カヅマヤマ古墳　13. マルコ山古墳　14. 真弓テラノマエ古墳　15. 佐田遺跡群　16. 東明神古墳　17. 佐田２号墳　18. 佐田１号墳　19. 出口山古墳　20. 蘇カシタニ遺跡　21. 蘇カシタニ塚古墳　22. 向山１号墳　23. 鍛冶遺跡　24. 松山吾谷古墳　25. 清水谷遺跡　26. ホラント遺跡　27. 阿部山遺跡群　28. 稲村山古墳　29. 観音寺遺跡　30. キトラ古墳　31. 阿部山廃寺　32. 呉原寺跡　33. 檜前門田遺跡　34. 檜前遺跡群　35. 檜隈寺跡　36. 坂ノ山古墳群　37. 檜前上山遺跡　38. 御園チシャイ遺跡・御園アリイ遺跡　39. 塚穴古墳　40. 高松塚古墳　41. 火振山古墳　42. 中尾山古墳　43. 平田キタガワ遺跡　44. 梅山古墳　45. カナヅカ古墳　46. 鬼ノ俎・雲隠古墳　47. 野口王墓古墳　48. 川原下ノ茶屋遺跡　49. 亀石　50. 西橋遺跡　51. 定林寺跡　52. 菖蒲池古墳　53. 五条野宮ケ原１・２号墳　54. 五条野向イ古墳　55. 五条野城島古墳　56. 五条野内垣内古墳　57. 植山古墳　58. 五条野丸山古墳　59. 鞋寺跡　60. 石川橋舎　61. 橘原遺跡　62. 田中廃寺　63. 和田廃寺　64. 雷丘北方遺跡　65. 大官大寺跡　66. カセヤ塚古墳　67. 廃中塚古墳　68. 山田寺跡　69. 上の井手遺跡　70. 奥山リウゲ遺跡　71. 奥山久米寺跡　72. 雷丘東方遺跡　73. 雷丘　74. 豊浦寺跡　75. 石神遺跡　76. 飛鳥水落遺跡　77. 飛鳥寺跡　78. 飛鳥東垣内遺跡　79. 竹田遺跡　80. 小原宮ノウシロ遺跡　81. 八釣・東山古墳群　82. 東山マキド遺跡　83. 金島塚古墳　84. 飛鳥池工房遺跡　85. 酒船石遺跡　86. 飛鳥京跡　87. 飛鳥京跡苑池遺構　88. 甘樫丘東麓遺跡　89. 川原寺裏山遺跡　90. 川原寺跡　91. 橘寺跡　92. 東橘遺跡　93. 島庄遺跡　94. 石舞台１～４号墳　95. 石舞台古墳　96. 馬場頭古墳群　97. 打上古墳　98. 都塚古墳　99. 我成組田古墳　100. 坂田寺跡　101. 飛鳥稲淵宮殿跡　102. 塚本古墳　103. 朝風廃寺　104. 稲淵ムカンダ遺跡

飛鳥地域周辺遺跡図（１：25,000）

飛鳥寺西方遺跡の調査

明日香村教育委員会

調 査 地：奈良県高市郡明日香村大字飛鳥
調査原因：範囲確認調査
調査面積：約 300 ㎡
調査期間：2011 年 7 月 1 日～現在継続中

1．はじめに

この調査は、飛鳥寺西方遺跡の範囲と構造を明らかにすることを目的として、平成 20 年度から実施している範囲確認調査である。今回の調査地は、「入鹿の首塚」から南へ約 90 m、飛鳥寺中金堂跡(現：安居院本堂)から南西へ約 130mである。飛鳥寺旧境内の外側にあたり、飛鳥寺西方地域の一郭にあたる。飛鳥寺西方地域は、『日本書紀』に度々登場する「飛鳥寺西槻」の地に推定されている。この「飛鳥寺西槻」の地では、壬申の乱時には軍営が置かれ、蝦夷や隼人などの辺境の人々への饗宴が行われたと記されている。ほかにも、大化の改新前夜に、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通じて出会った場所とも考えられている。これら文献史料の研究成果によって、この地域には蹴鞠や軍営を営むほどの広い空間が広がっていたことが推測されている。

飛鳥寺西方地域は、これまでに奈良文化財研究所や奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会によって発掘調査が行われてきた。西門は、1956・57 年に奈文研によって発掘(『飛鳥寺発掘調査報告』)が行われ、西門の門前については、奈文研によって 1984 年度 K 地点調査と 1996-1 次調査(『奈良国立文化財研究所年報 1997-Ⅱ』)が行われた。

飛鳥寺南方については、石敷広場が飛鳥寺と異なる方位で発見された。この石敷広場は近年、奈文研によりその東限が確認された。一方、西側への延長は確認されておらず、当調査区は西側延長線上にあたる。

また、首塚から南にかけては、橿原考古学研究所が 1966 年に飛鳥京跡第 11 次調査(『飛鳥京跡二』)を行っている。近年では、西門から西へ 120m付近で西門へ延びる参道かと見られる石敷を検出している。

西門門前付近の成果をまとめると、以下のとおりである。西門あるいは西面大垣から西へ約 9 mの位置に幅 1.2mの石組大溝 SD6685 があり、西約 18mにも幅 50 cmの石組小溝 SD6684 がある。石組大溝の西に接して南北方向の掘立柱塀 SA738 があり、石組大溝より時期的に古い。大垣の西約 14mの地下には土管暗渠 SX740 が埋設されている。西門から西へ約 25m、首塚の南側には幅 4.3mの敷石遺構 SH6682 がある。土管暗渠が西門付近で南北 100m以上確認され、南から北に流下するとされる。これらの遺構は 2 時期に区分され、掘立柱塀 SA738 は 7 世紀前半、石組大溝 SD6684・6685 や敷石遺構は 7 世紀後半と位置付けられている。土管暗渠 SX740 の年代については、 7 世紀初頭または後半と 2 つ見解がある。

このような、飛鳥寺西方での調査成果をふまえ、史料に残る「飛鳥寺西」の範囲明らかにすることを目的として調査を実施した。また、今回の調査地は西方広場と南方広場が交差する地点と予想され、それに関わる遺構の検出が期待された。調査総面積約 300 ㎡である。

2．検出遺構

南北石組溝

調査区の東にある石組溝。幅約 1.2m、深さ 15 ㎝。ＳＤ6685 の南側延長部にあたる。側石は約 60cm の石を 1 段積んだもので、西側石は比較的残りが良い。しかし、東側石はすべて抜き取られている。溝底には拳大から人頭大の底石を敷く。この底石の上は 10 ㎝大の礫が覆われており、この石組溝は、最終的に礫で覆われた時期があったと考えられる。時期を特定できる遺物は確認できないが、既往の調査成果から 7 世紀後半に位置づけられる。

東西石組溝

調査区の南にある東西方向の石組溝。幅 90 ㎝。深さ約 10 ㎝。側石、底石とも約 15 ㎝大の石である。底石に関しては溝の東西で敷いている石の大きさが異なり、西側は比較的小ぶりな石を用いている。途中、素掘溝によって壊されて分断されているが、調査区の東側まで延長する。溝の底石には天理砂岩が 1 点転用されている。天理砂岩の転用が 7 世紀後半以降から認められるという研究成果からみて、溝の造営時期は 7 世紀後半以降と考えられる。

石列

東西石組溝の北側 1.4mの位置で平行する石列である。約 15 ㎝大の石を並べている。面は揃っていない。途中、素掘溝によって壊されているが、調査区の東側に延長する。その延長部では、南北石組溝の底石が途切れている。東西石組溝と平行することから同時期に敷設されたと考えられる。

素掘溝

南北石組溝の西側に砂礫を多く含む溝 SD739 がある。東西石組溝と石列を分断する。幅は約 3 mを測る。SD739 は石組溝より新しく、奈良時代以降である。

土管暗渠掘形

直径約 20 ㎝の瓦製土管を連結した遺構。土管暗渠ＳＸ740 の南側延長部である。暗渠掘形は、幅 1.6mを測る。掘形埋土には黄褐色山土や礫を含む。1996-1 次調査時で検出した土管はほぼ正方位に並んでいたが、村教委による 21 年度調査によって土管は南東方向に斜行することがわかっている。今回検出した土管暗渠は、その斜行する掘形の延長部である。掘形は南北石組溝の下に延長することから、土管を埋めた後に、南北石組溝を敷設したと考えられる。

砂利敷

整地土上面に敷かれた砂利敷である。5～10 ㎝大の川原石を敷く。南北石組溝の上面にある砂利及び礫はこの砂利敷と同時期に覆われたと考えられる。

３・まとめ

飛鳥寺西方域で飛鳥時代の石組溝、石列、土管暗渠掘形、砂利敷、素掘溝を検出した。今回の調査によって、飛鳥寺西門門前の調査で検出されていた遺構がさらに南側にまで広がっていたことが明らかとなった。遺構の変遷は 7 世紀後半代を中心に、その前後で遺構が交錯し、最終的には全面砂利敷で覆われる状況であったと考えられる。また、これまで確認できた遺構では、土管暗渠が南北 180m以上、南北石組溝が 130m以上にわたって延長することも確認できた。

また、今回の調査においても、建物に伴う柱穴を検出できなかった。これまでの調査からみて、建物などの遺構検出が少ないことから、当地域は建物が希薄な地域であろう。

当調査区は飛鳥寺南方遺跡にみられる石敷広場の西側延長線上にあたることから、当調査区でも斜行する石敷広場の検出が期待された。しかし、調査区内で検出した遺構は、いずれも正方位に近く、斜行する振れの遺構は確認できなかった。よって、飛鳥寺南方にある石敷広場は当調査地まで延長しないことが明らかとなった。

今回の発掘によって、西門から今回の調査区にかけて石敷きなどで整備されていた状況を知ることができた。いわゆる「槻樹の広場」に相当する可能性があり、今後の調査によって飛鳥寺西の実態の解明が期待される。

※※※飛鳥寺西に関する史料（『日本書紀』）※※※

① 皇極三年（644）正月乙亥朔条
中臣鎌子連、（中略）偶に中大兄に、**法興寺の槻樹の下**に、打毬の侶に預りて、皮鞋の毬の隨に脱げ落つるを候りて、掌中に取置ちて、（後略）

② 孝徳即位前紀大化元年（645）六月乙卯条
天皇、皇祖母尊、皇太子、**大槻樹の下**に群臣を召集めて盟はしめたまふ。

③ 斉明三年（657）七月辛丑条
須彌山の像を**飛鳥寺の西**に作る。且つ盂蘭盆会を設く。暮に都貨羅人に饗たまふ。

④ 天武元年（672）六月己丑条
爰に留守司高坂王、及び兵を興す使者穂積臣百足等、**飛鳥寺の西の槻の下**に據りて営を為す。（中略）爰に百足馬に乗りて緩く来れり。飛鳥寺の西の槻の下に逮るに、（後略）

⑤ 天武六年（677）年二月条
是の月、多禰島人等に**飛鳥寺の西の槻の下**に饗へたまふ。

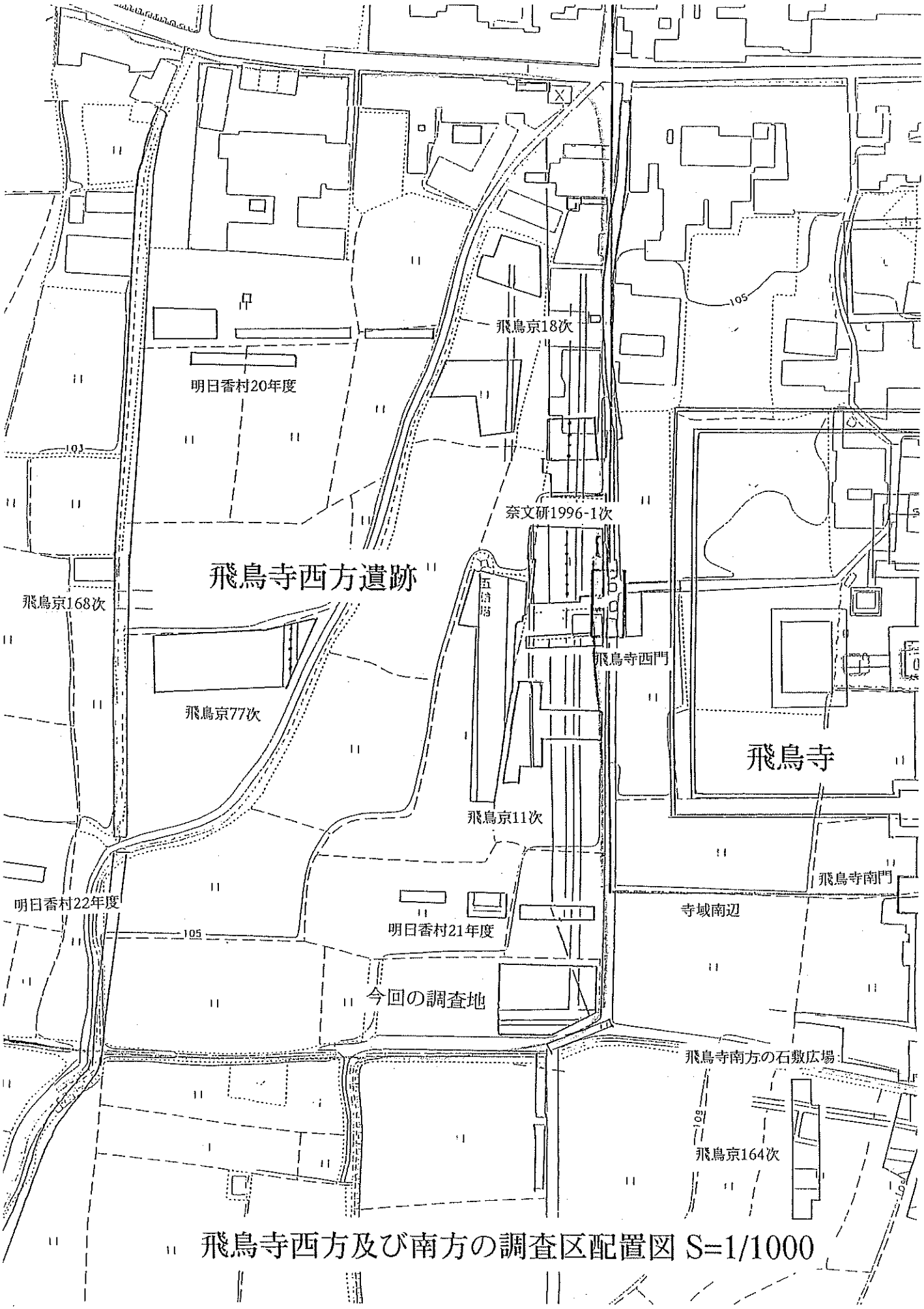
⑥ 天武九年（680）七月甲戌朔
飛鳥寺の西の槻の枝、自ら折れて落つ。

⑦ 天武十年（681）九月庚戌条
多禰島の人等に**飛鳥寺の西の河邊**に饗し、種種の楽を奏す。

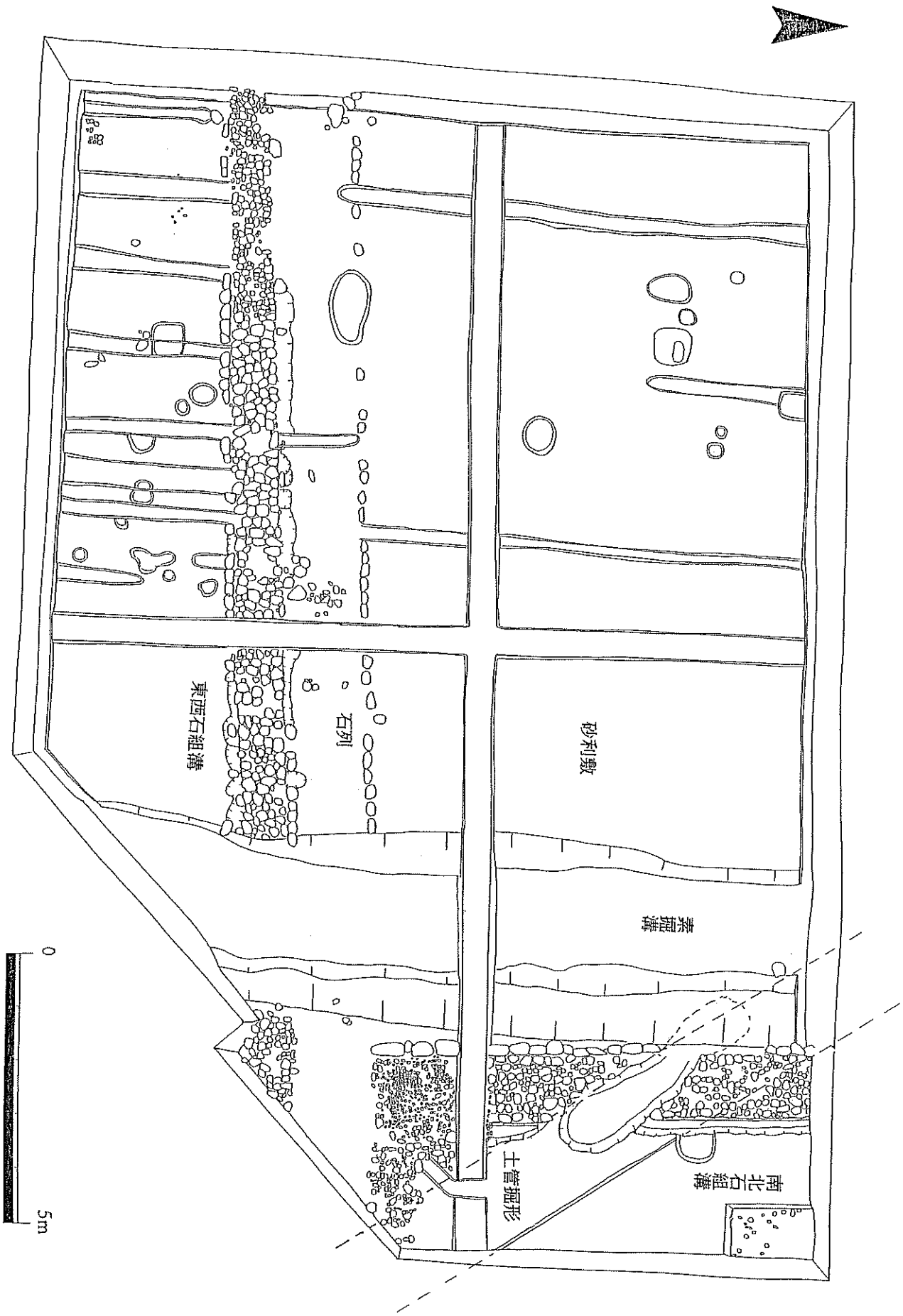
⑧ 天武十一年（682）七月戊午条
隼人等に**飛鳥寺の西**に饗へたまひ、種種の楽を発す。

⑨ 持統二年（688）十二月丙申条
蝦夷の男女二百一十三人を**飛鳥寺の西の槻の下**に饗へたまふ。

⑩ 持統九年（695）五月丁卯条
隼人の相撲を**西の槻の下**に観したまふ。



飛鳥寺西方及び南方の調査区配置図 S=1/1000



遺構略測図 S=1/100

西飛鳥の最近の調査

1．はじめに

2．西飛鳥における最近の調査

1）マルコ山古墳 (2004 年)

対辺長約 23m の多角形墳。墳丘西裾部分でバラス敷と暗渠排水溝を検出。築造年代は７世紀末。

【参考文献】　『明日香村遺跡調査概報平成 16 年度』明日香村教育委員会

2）カヅマヤマ古墳 (2005～2006 年)

一辺約 23m の二段築成の方墳。埋葬施設は結晶片岩を用いた磚積石室で、玄室には棺台が設けられている。鉄釘、漆片、歯牙・人骨などが出土。築造年代は７世紀後半。

【参考文献】　『カヅマヤマ古墳発掘調査報告書』明日香村教育委員会

3）真弓遺跡群 (2006 年)

スズミ１号墳　一辺約 10m の方墳。埋葬施設は南に開口する右片袖式横穴式石室。
ミニチュア炊飯具、土師器、須恵器、鉄釘など出土。築造年代は６世紀後半。

スズミ２号墳　一辺約７m の方墳。埋葬施設は木棺直葬。耳環、鉄釘、歯牙出土。

【参考文献】『明日香村遺跡調査概報 平成 18 年度』明日香村教育委員会

5）真弓鑵子塚古墳(2007～2008 年)

直径約 40m、高さ８m 以上の二段築成の円墳。埋葬施設は南に開口する右片袖式の窿状横穴式石室。玄室北側に奥室を有している。獣面飾金具、ガラス玉、ミニチュア炊飯具、凝灰岩、結晶片岩など出土。築造年代は六世紀中～後半。

【参考文献】『真弓鑵子塚古墳発掘調査報告書』明日香村教育委員会

6）真弓テラノマエ古墳(2009 年)

墳丘の詳細は不明。盛土は版築が行われている。埋葬施設は結晶片岩を用いた磚積石室で、玄室奥壁付近の基底部のみ残存している。玄室幅は約 1.7m で、玄室床面には幅約 90cm、高さ約 12cm の平瓦を用いた棺台が残存している。棺台と玄室壁面全体に漆喰が塗布されている。墳丘法面には結晶片岩の板石が積み上げられている。築造年代は７世紀前半。

【参考文献】『明日香村遺跡調査概報 平成 21 年度』明日香村教育委員会

7）牽牛子塚古墳(2009～2010 年)

対辺長約 22m、高さ 4.5m 以上の八角形墳。埋葬施設は凝灰岩の巨石を用いた刳り貫き式横口式石槨で合葬墓である。石槨の周囲は石英安山岩の切石が囲繞している。夾紵棺片、ガラス玉など出土。築造年代は７世紀後半。

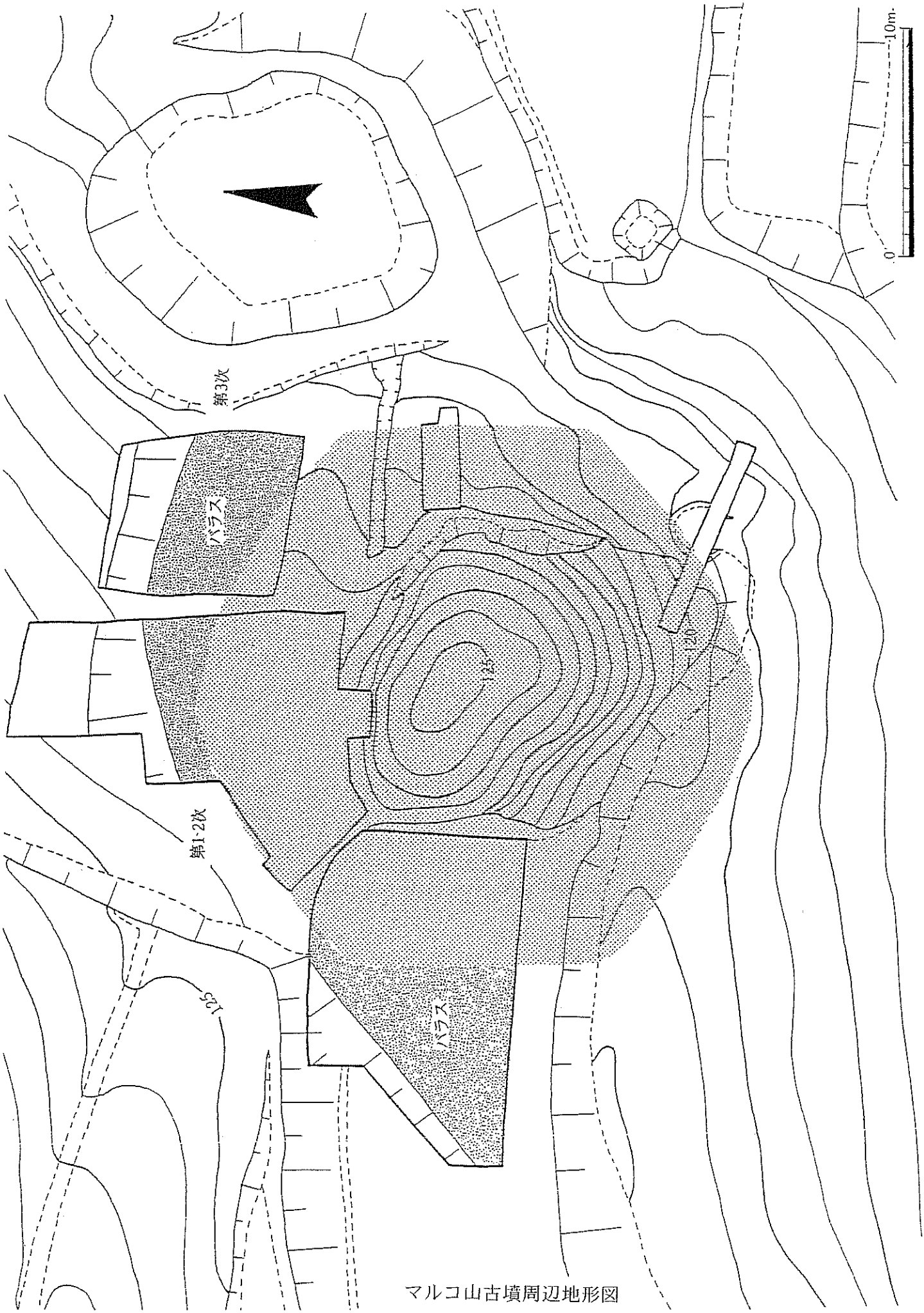
【参考文献】『明日香村遺跡調査概報 平成 21 年度』明日香村教育委員
『牽牛子塚古墳』明日香の文化財⑮　現地見学会リーフレット

8）越塚御門古墳(2010～2011 年)

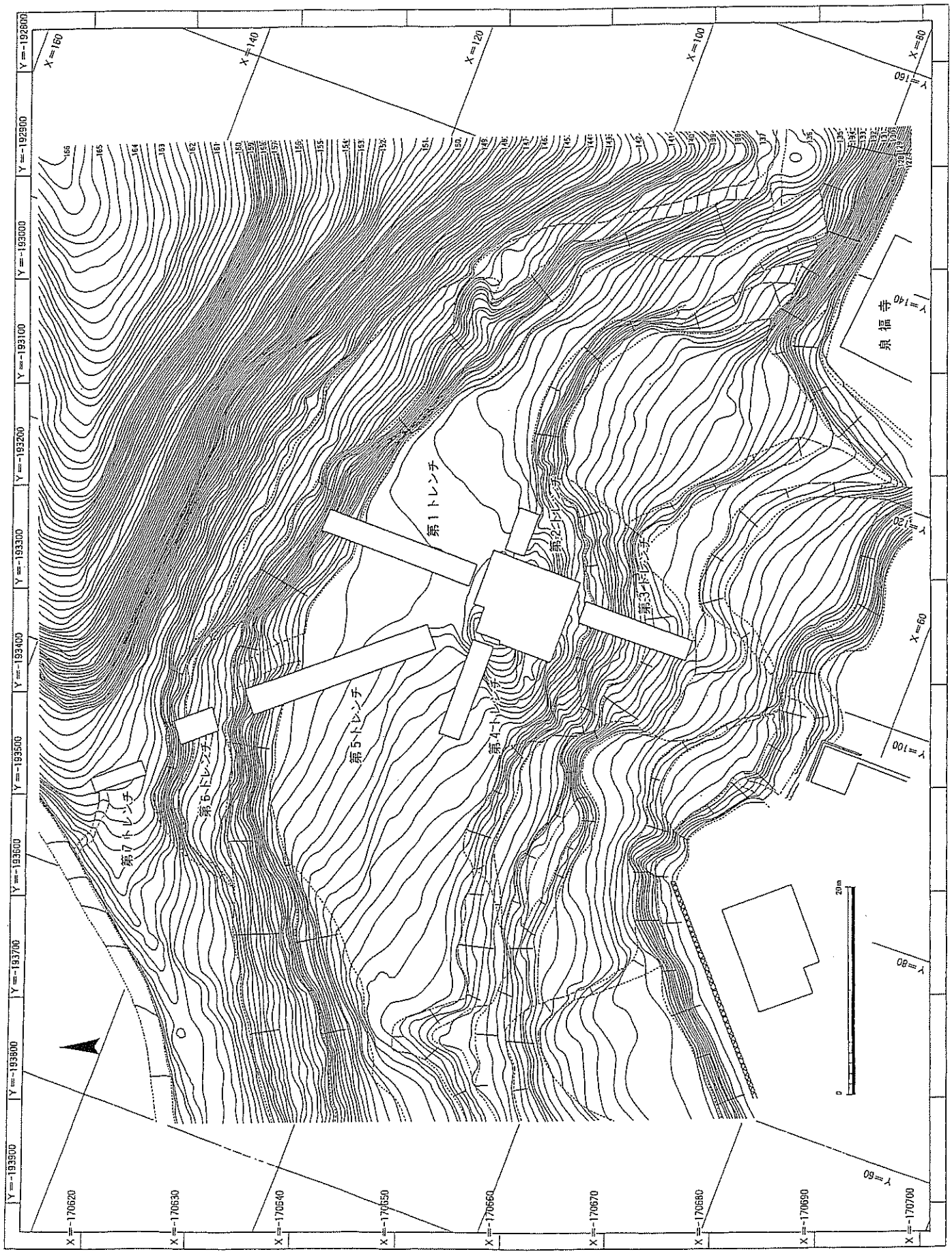
墳丘の詳細は不明。埋葬施設は石英閃緑岩を用いた刳り貫き式横口式石槨で単葬墓である。鉄釘、漆膜が出土。主軸の異なる墓道が存在している。築造年代は７世紀後半。

【参考文献】『越塚御門古墳』明日香の文化財⑯　現地見学会リーフレット

3．おわりに

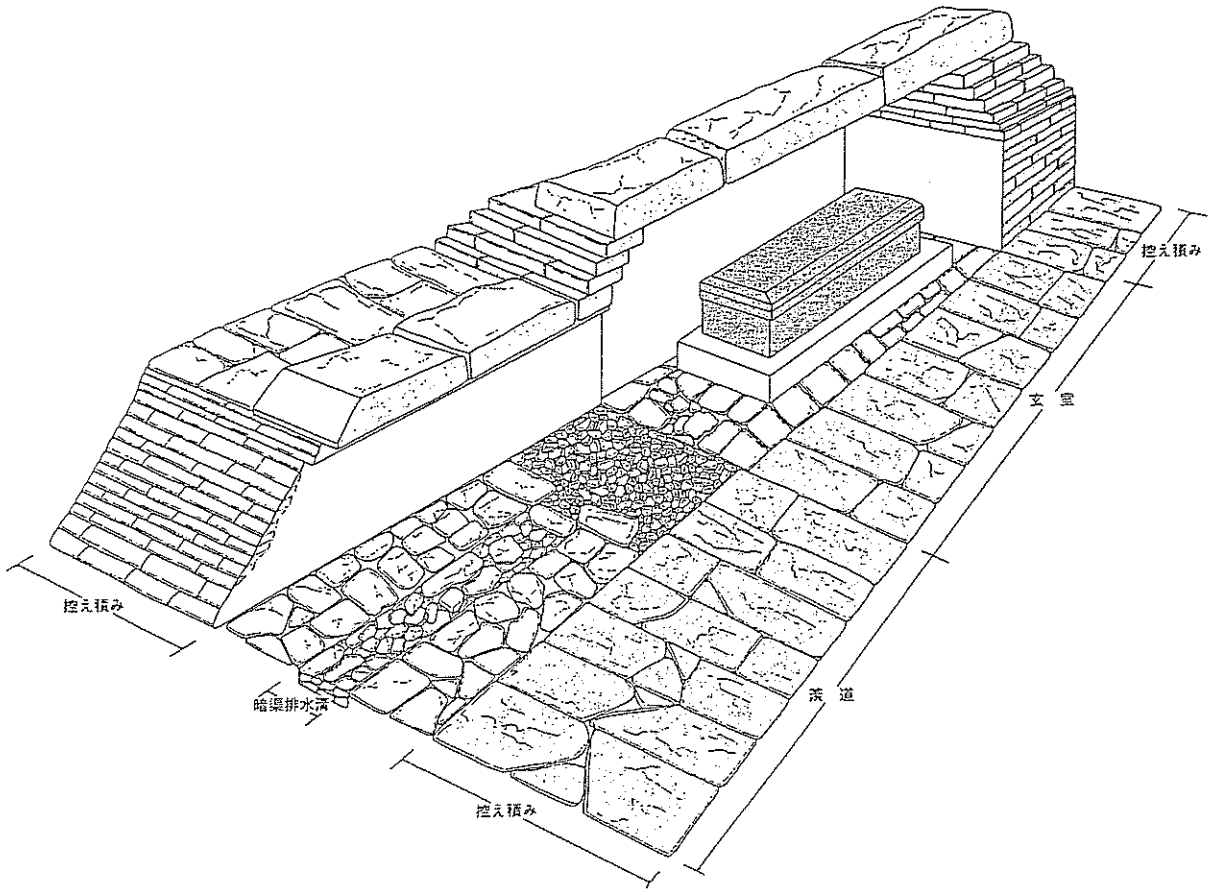


マルコ山古墳周辺地形図

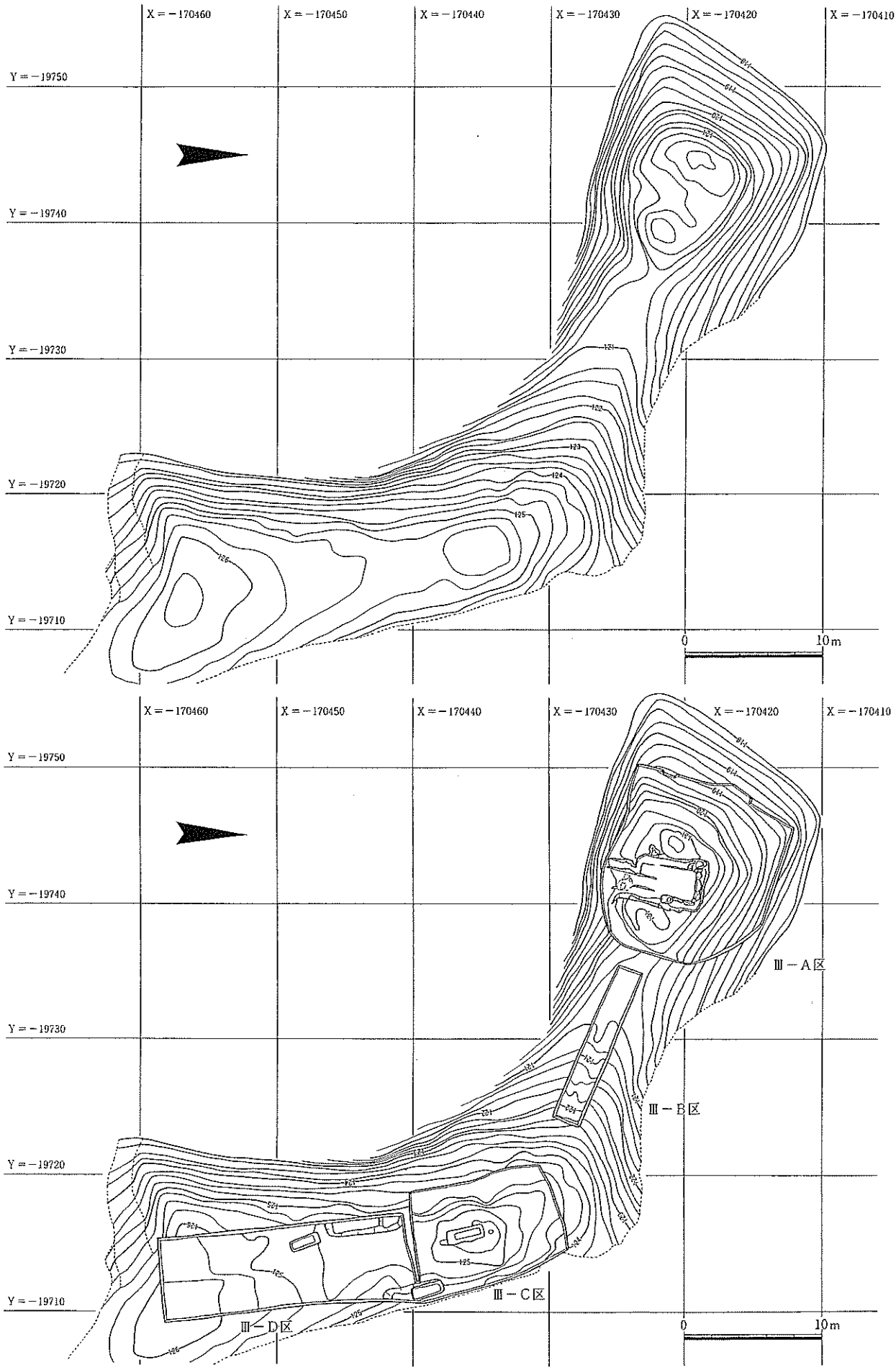


カヅマヤマ古墳　調査区配置図（1：500）

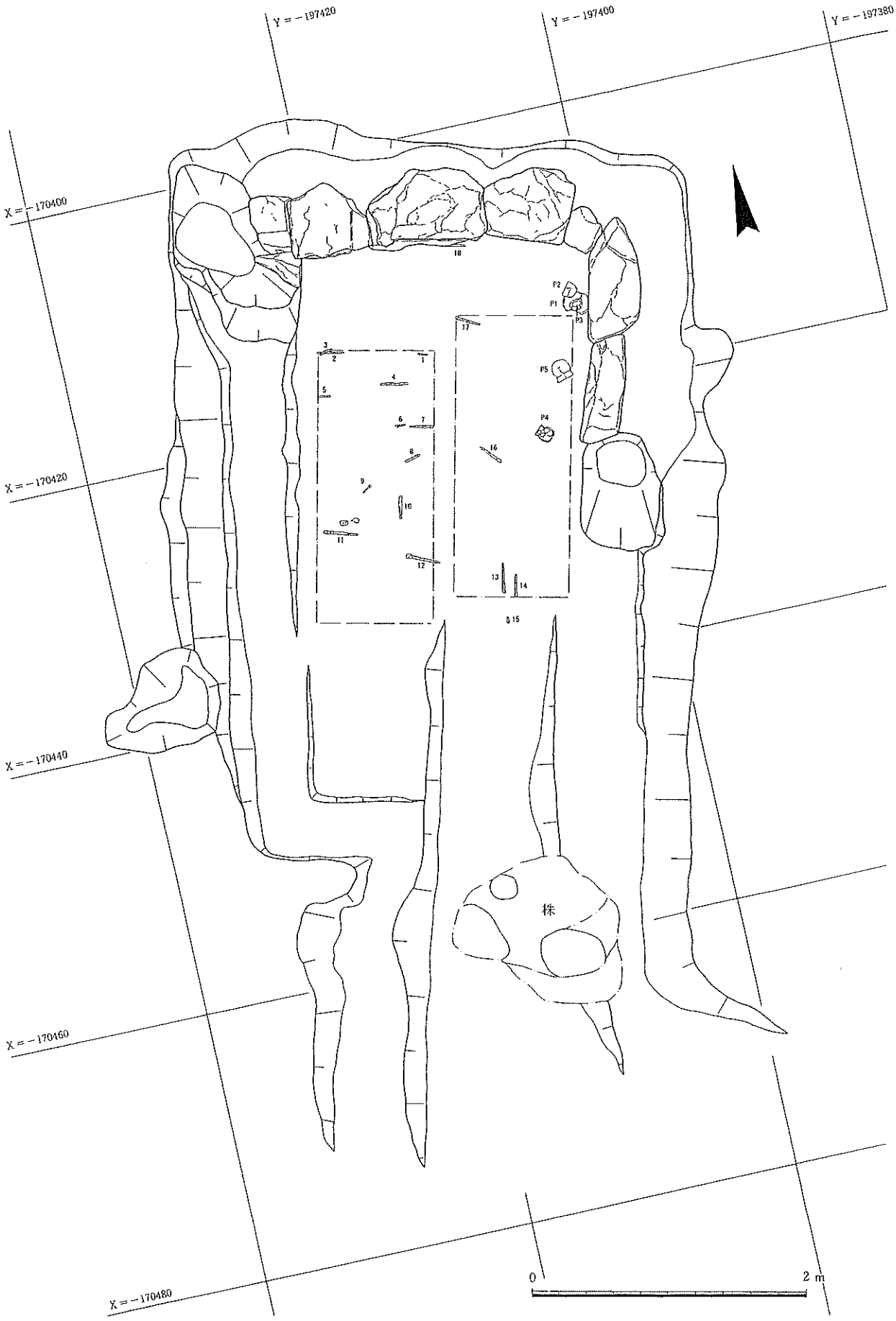
埋葬施設調査区平面図



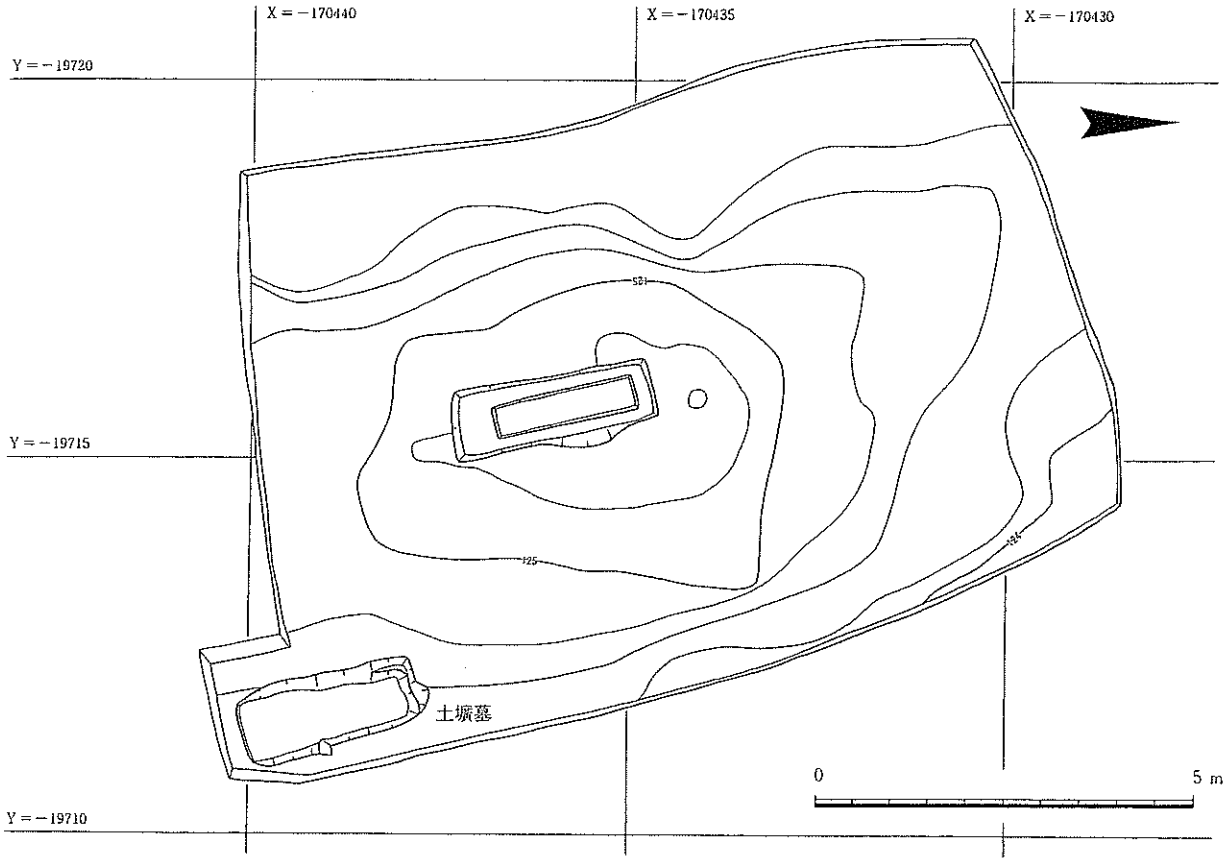
カヅマヤマ古墳　石室名称図



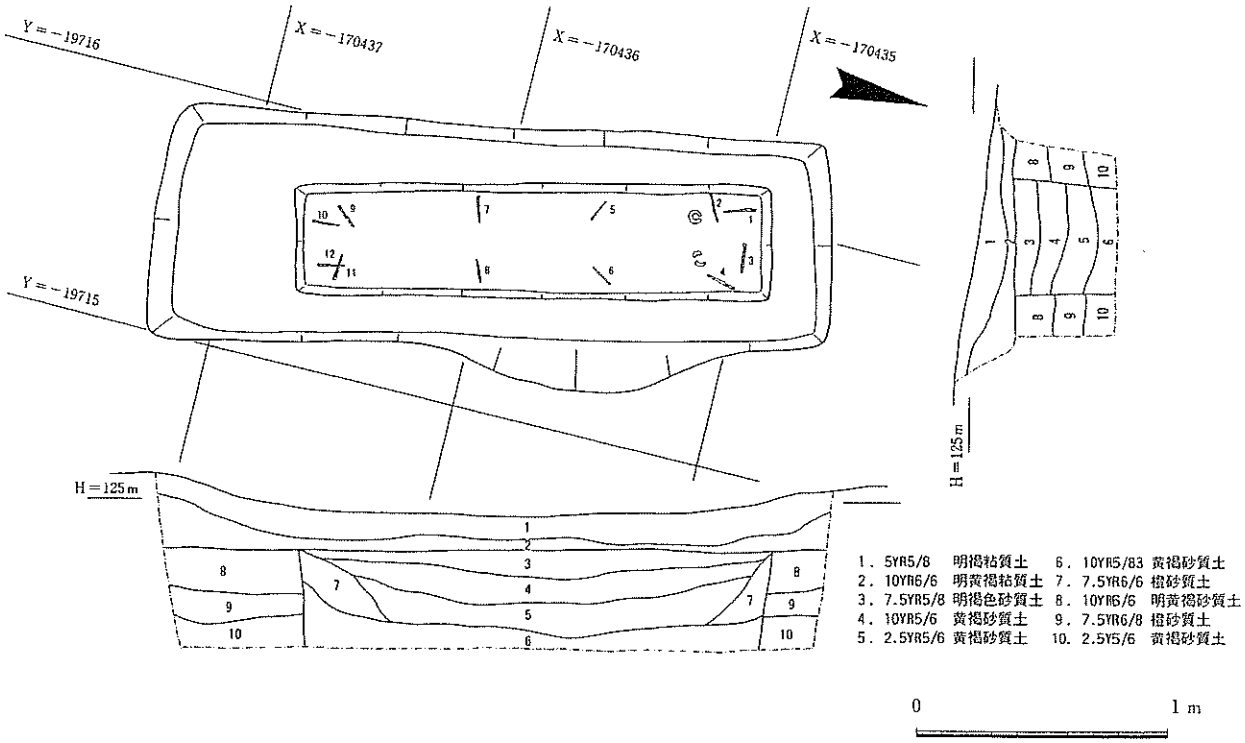
真弓遺跡群（Ⅲ区）遺構図（上・調査前、下・調査後）



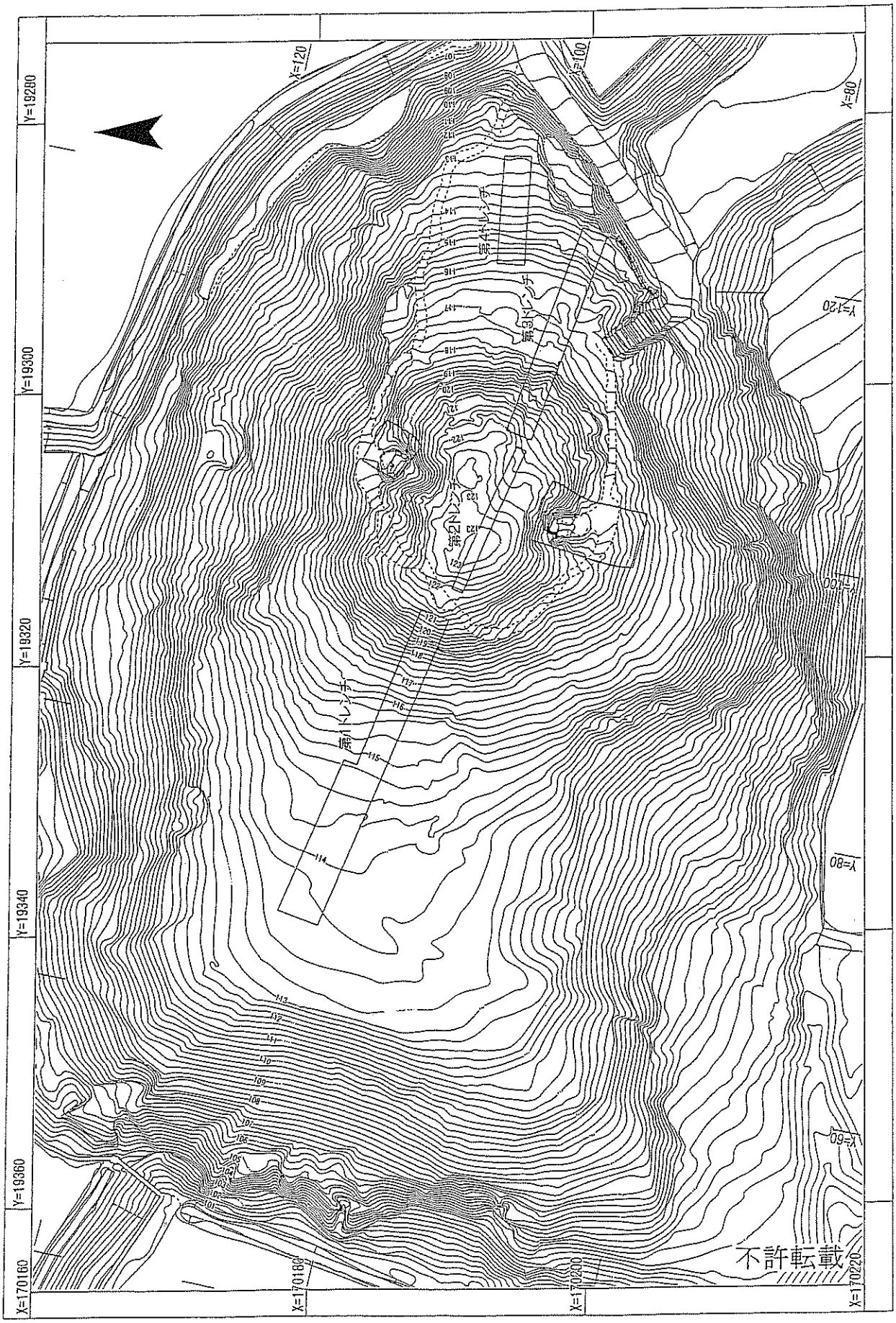
真弓スズミ１号墳石室平面図



真弓スズミ２号墳（Ⅲ－Ｃ区）遺構図

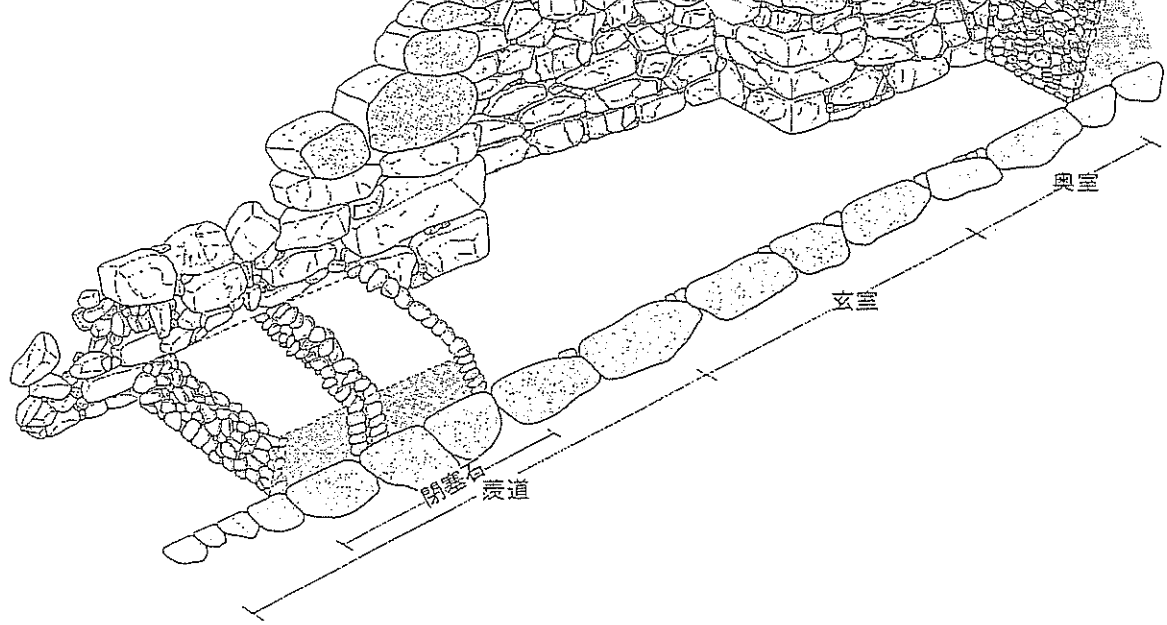


真弓スズミ２号墳埋葬施設　平面図・断面図

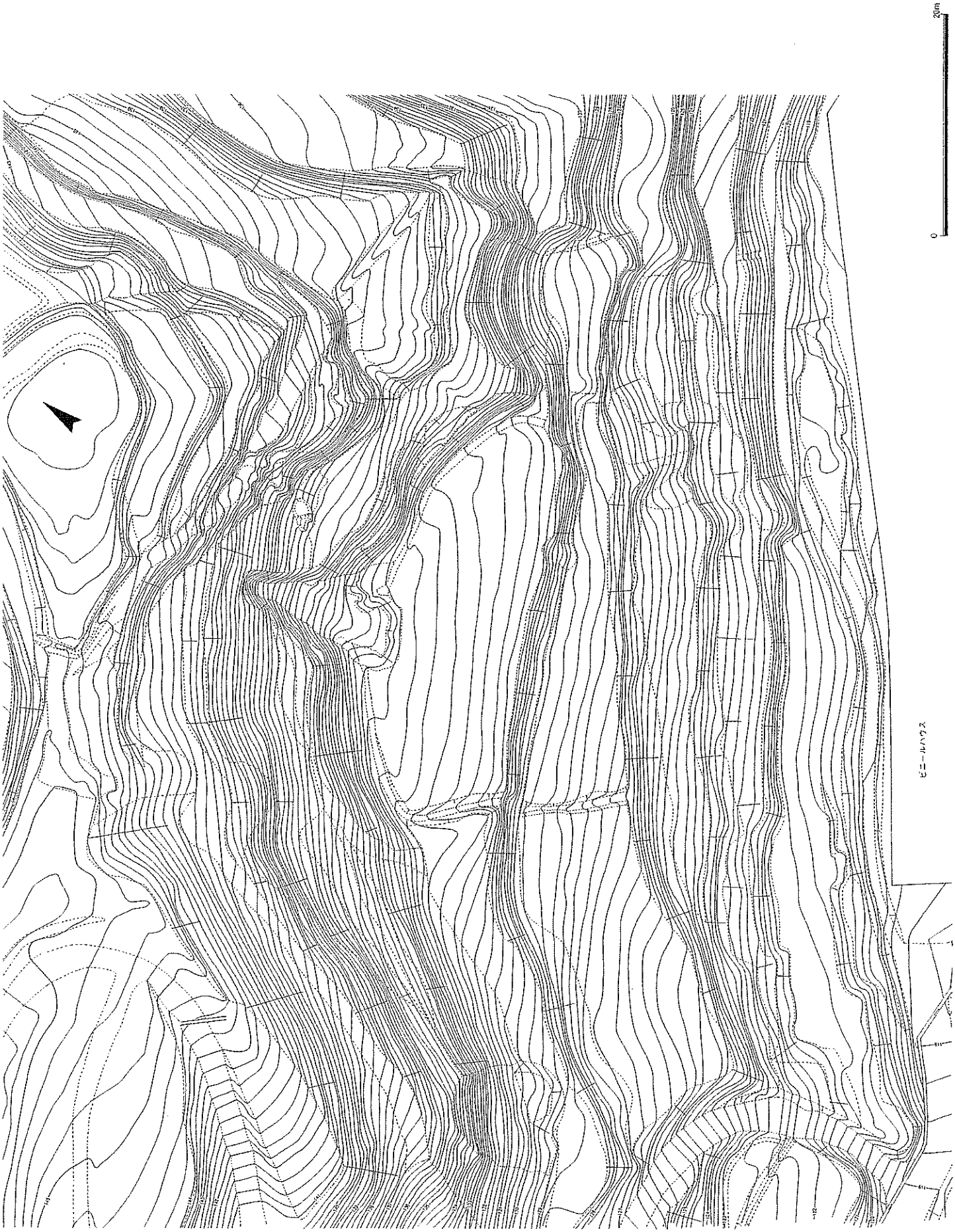


真弓鑵子塚古墳　調査区配置図（1:400）

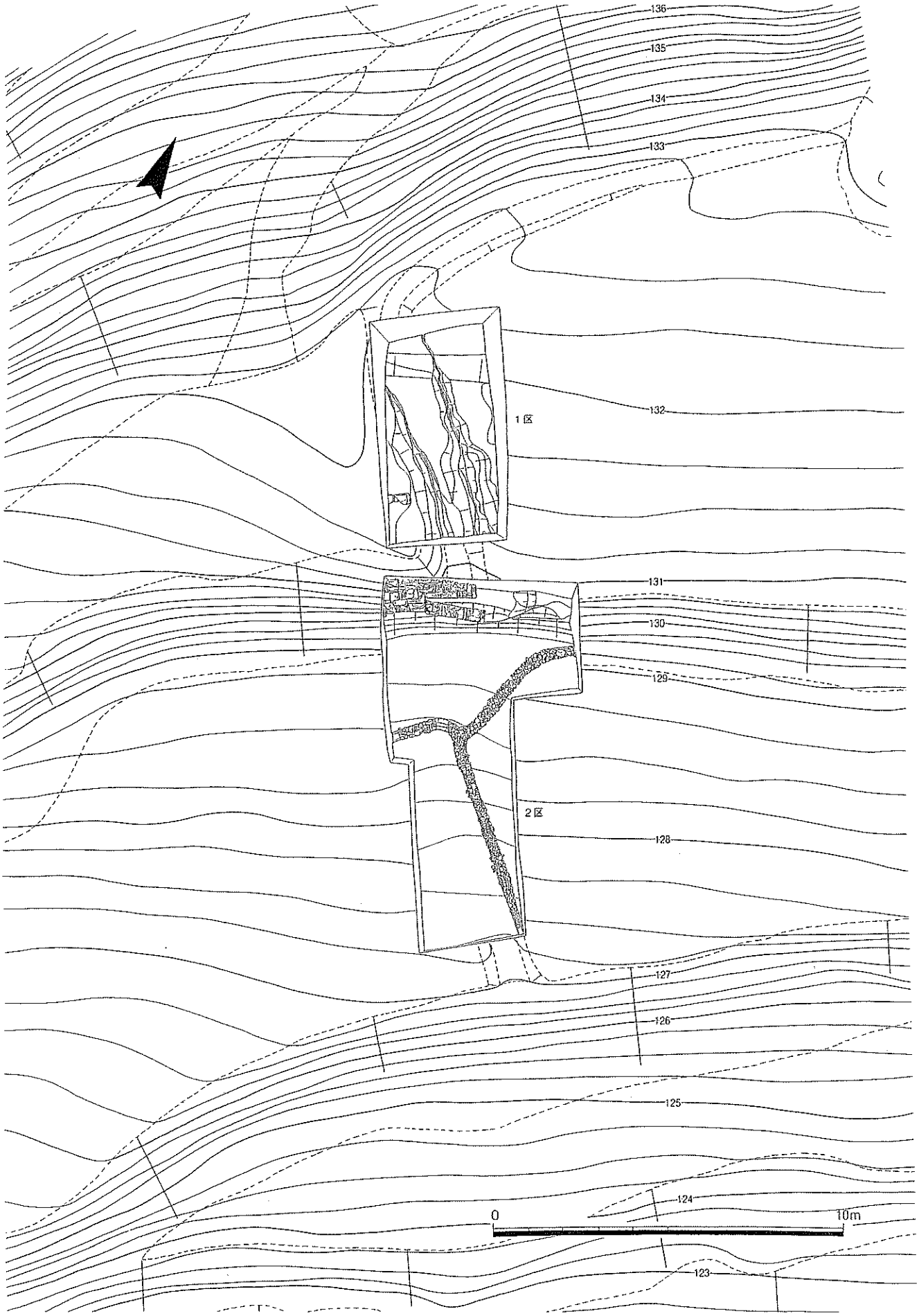
真弓鑵子塚古墳　埋葬施設平面図・立面図



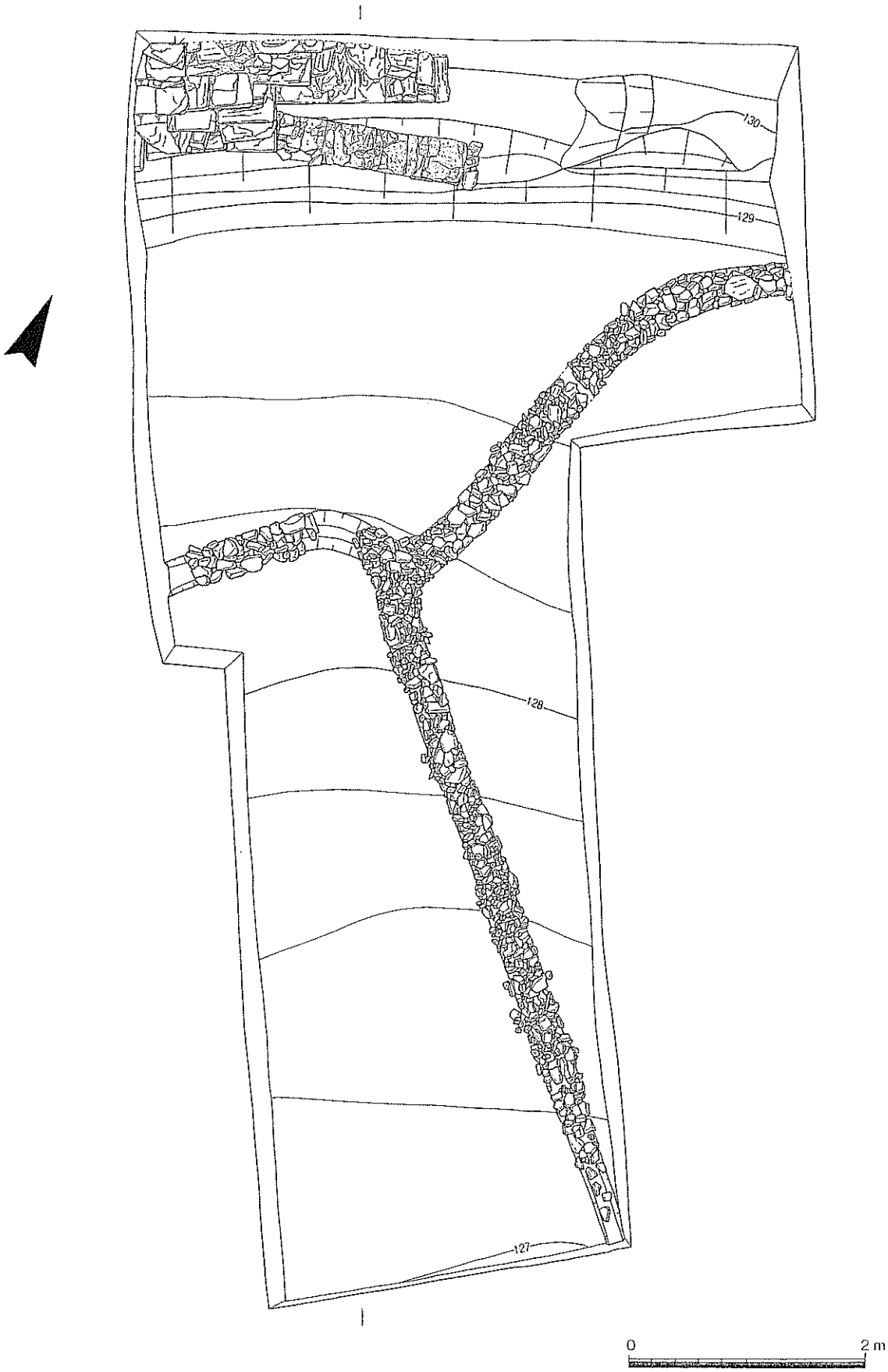
真弓鑵子塚古墳　石室名称図



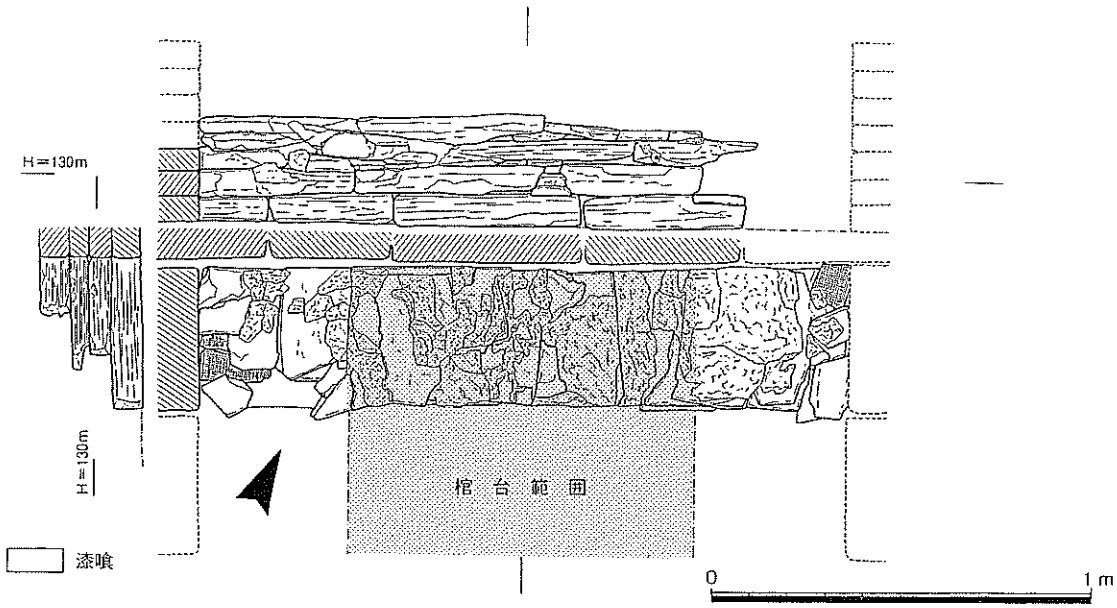
真弓テラノマエ古墳　墳丘測量図



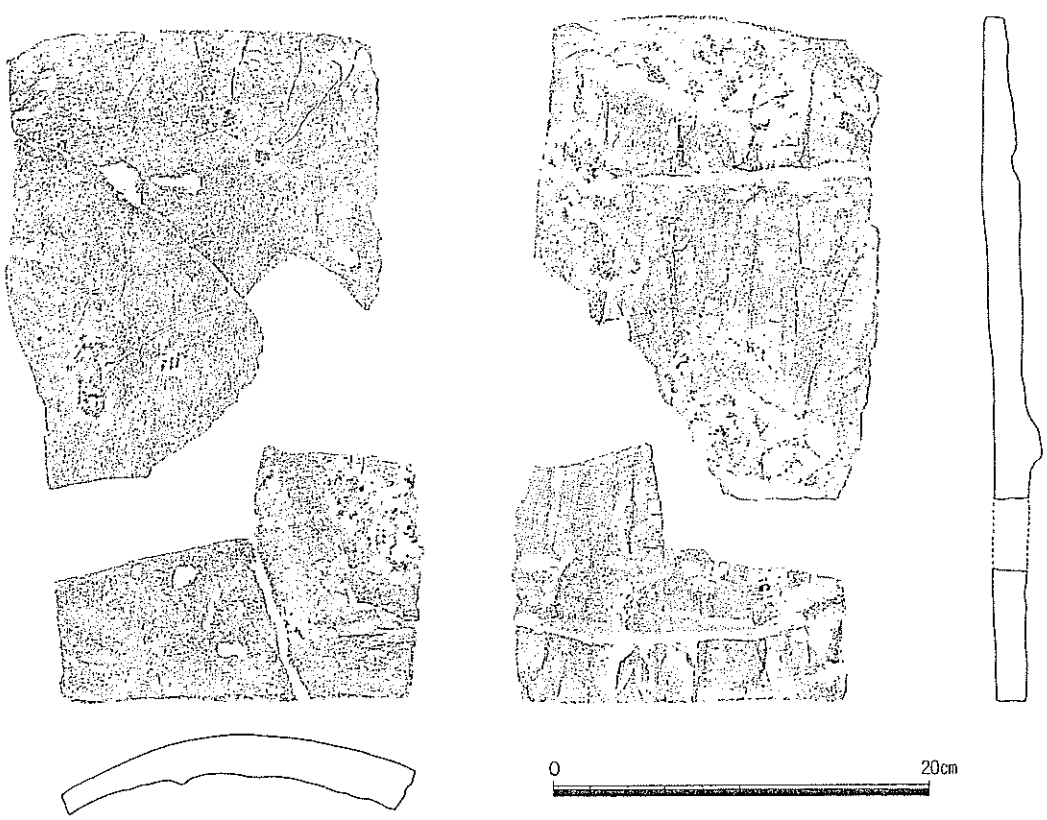
真弓テラノマエ古墳調査位置図



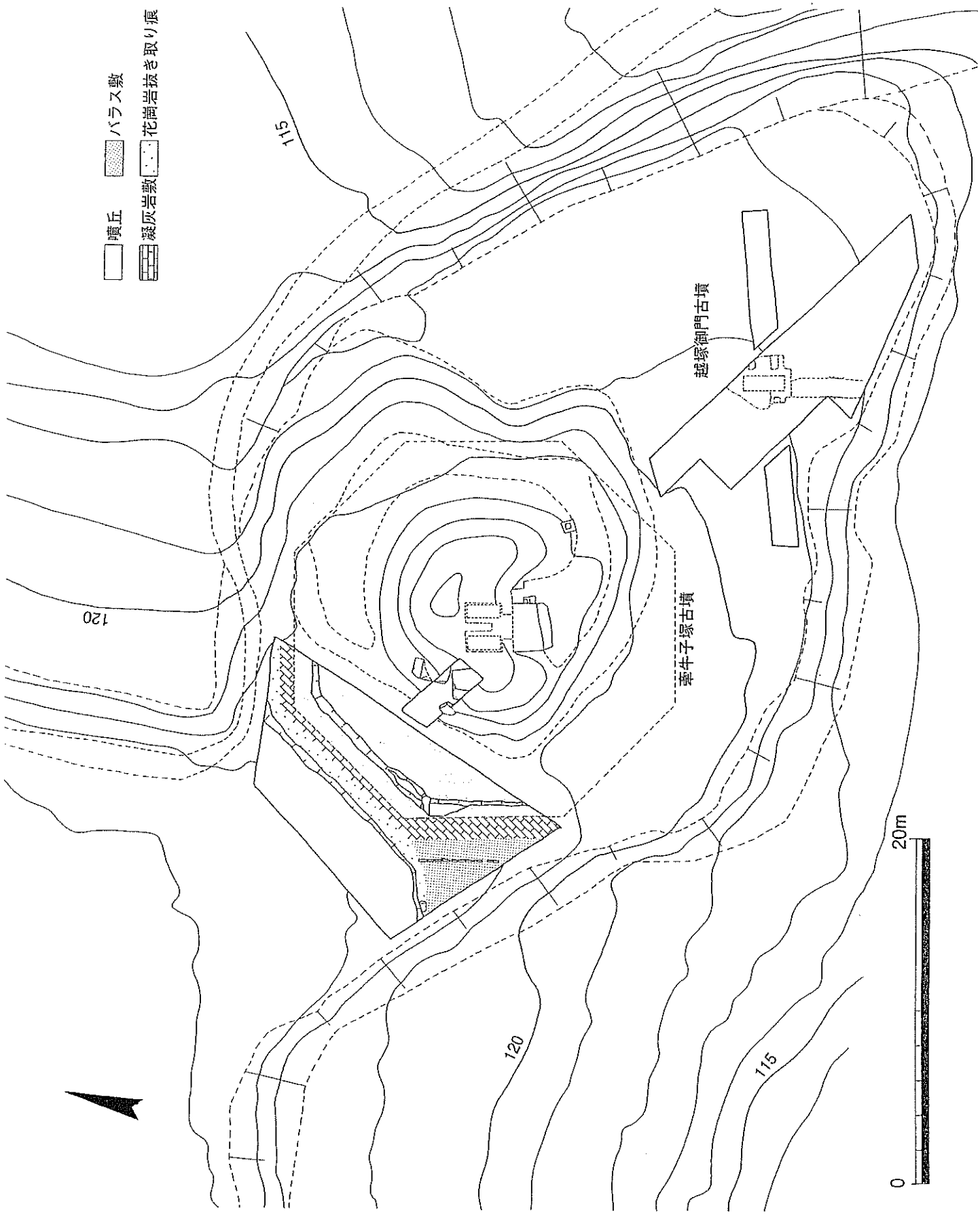
真弓テラノマエ古墳　２区平面図



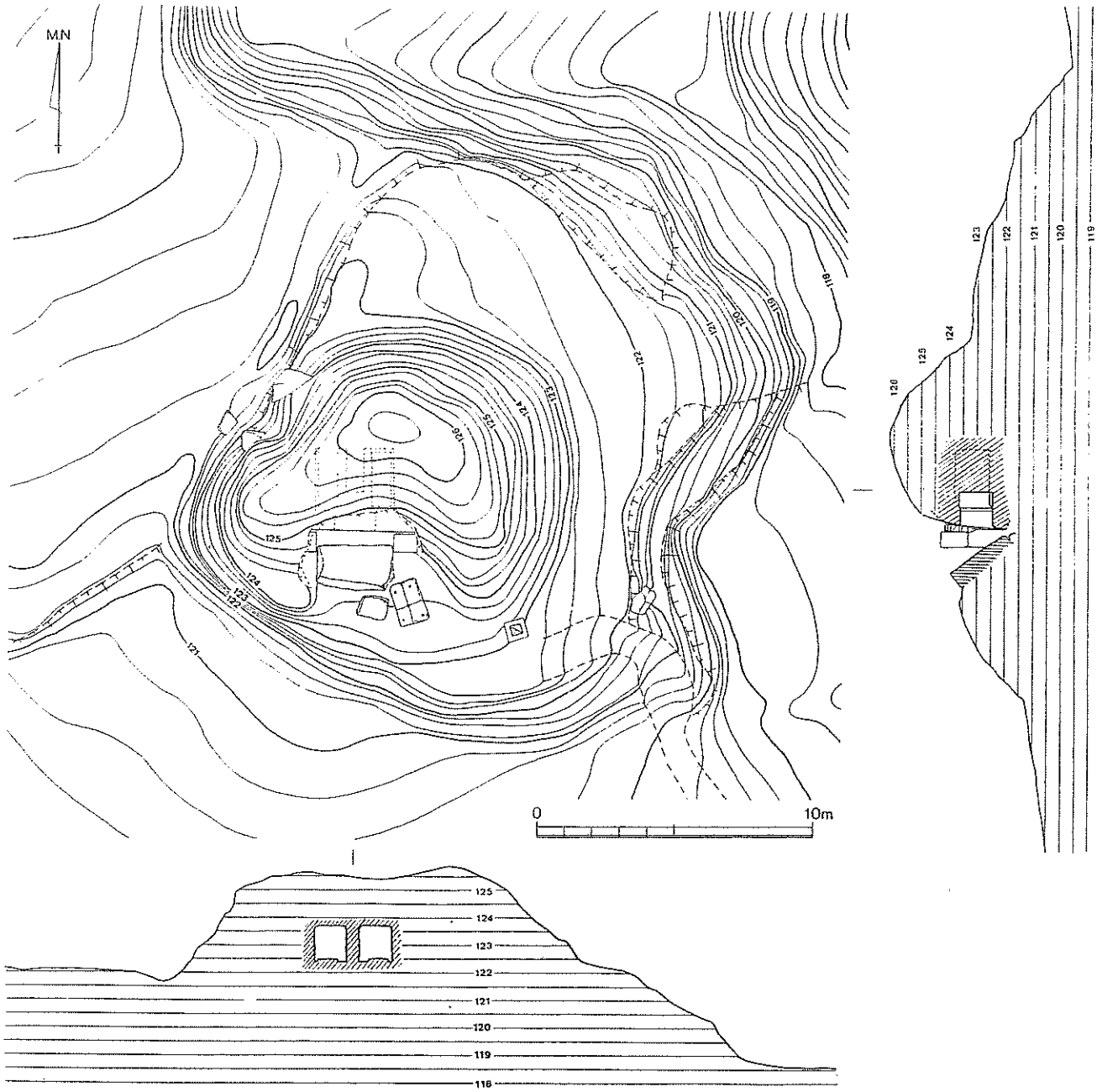
真弓テラノマエ古墳　埋葬施設平面図・立面図（床面・棺台の位置は復元配置）



真弓テラノマエ古墳　棺台使用平瓦（１：４）



牽牛子塚古墳・越塚御門古墳　調査位置図



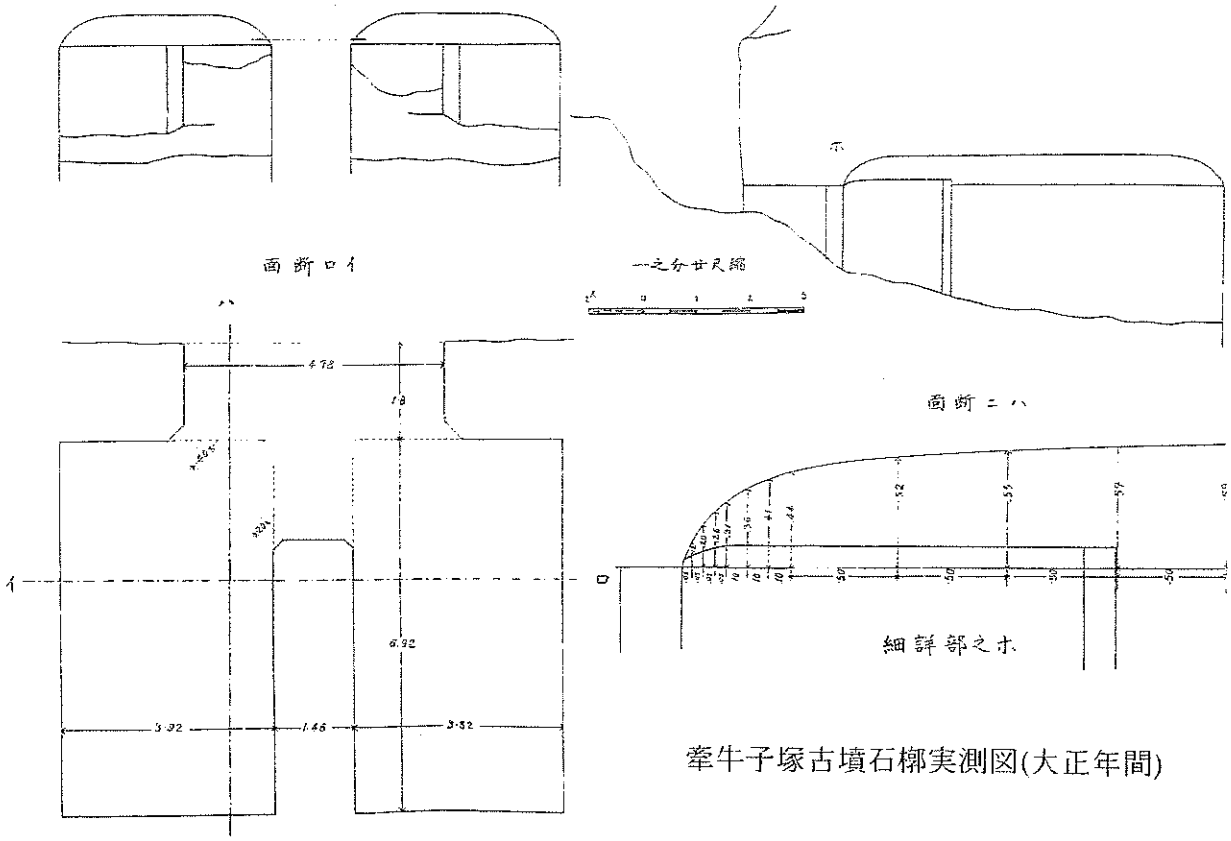
牽牛子塚古墳墳丘測量図

（第五圖）

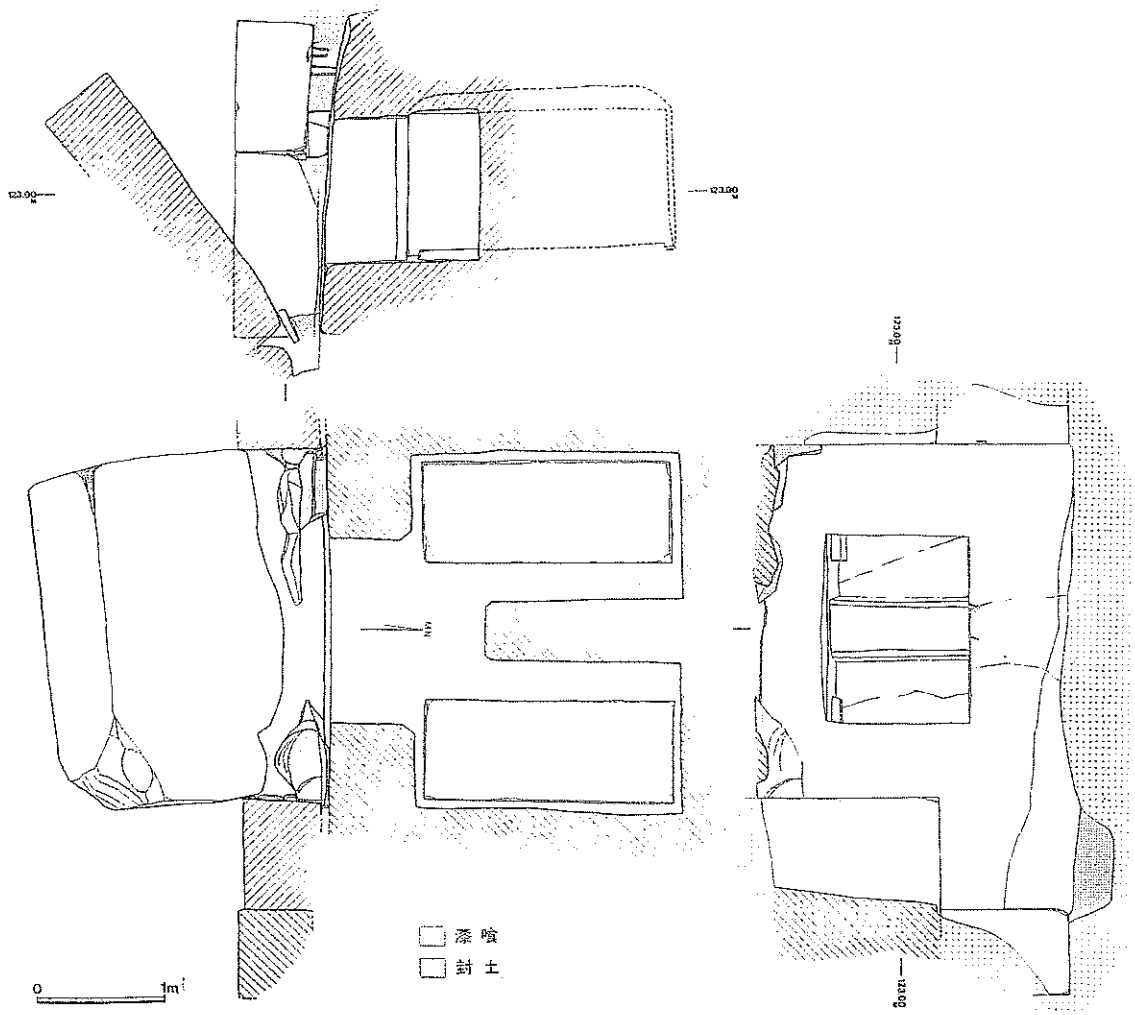
奈良縣高市郡大村合阪郡市高越宇

牽牛子塚之圖

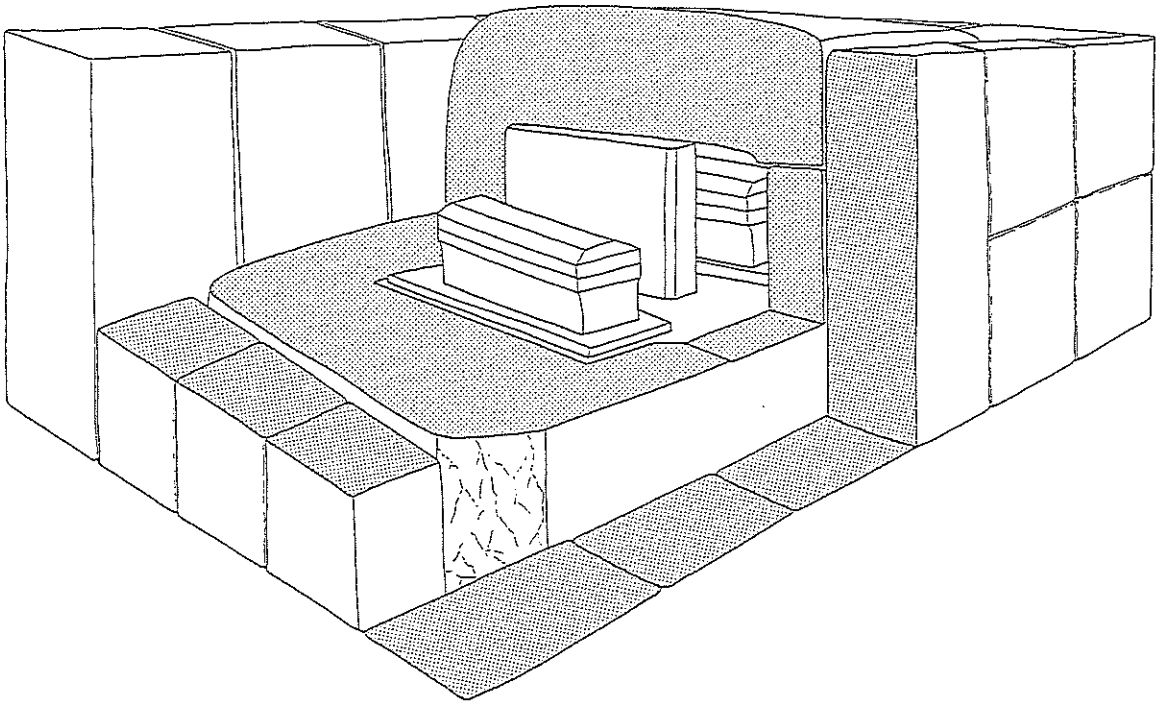
（製氏一俊沿天）



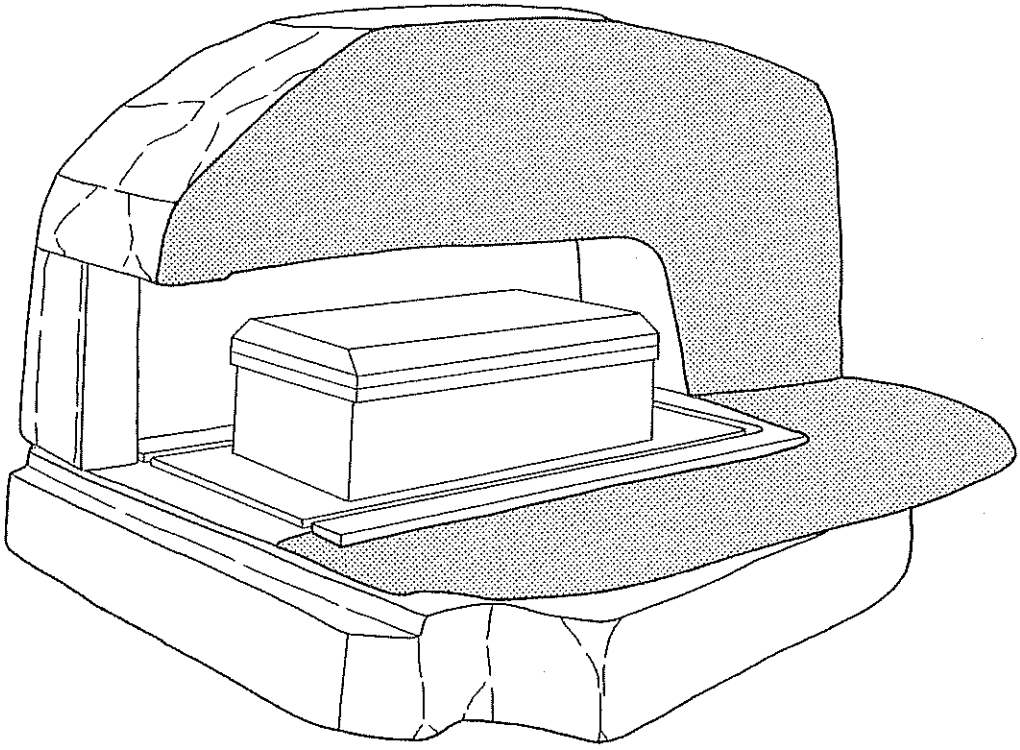
牽牛子塚古墳石槨実測図(大正年間)



牽牛子塚古墳石槨実測図(昭和 52 年)



牽牛子塚古墳　埋葬施設復元図（棺は想像図）



越塚御門古墳　埋葬施設想像図（棺は想像図）

講　演

「飛鳥寺西の槻の広場－宮廷儀礼を探る」

明日香村文化財顧問

東京学芸大学名誉教授

木下正史　氏

飛鳥寺西の槻の広場－宮廷儀礼を探る－

2011、11、26　　木下正史

＜はじめに＞

1、飛鳥寺：日本最初の本格的伽藍寺院。飛鳥盆地内に造られた最初の大規模施設。
　1）飛鳥寺の位置：南北2km余、東西300～500mの飛鳥盆地内の南北の中央。
　2）飛鳥寺の占地：後の宮殿、寺院などの造営地に大きく影響。それを制約。
2、飛鳥寺の西で、飛鳥川までの範囲：
　1）現飛鳥川から飛鳥寺までの距離：180m～200m。高低差約6m。
　　①飛鳥寺西限から120m以西：急な段差。不整形の水田。飛鳥川の氾濫原。
　2）飛鳥寺の西で利用可能な平坦地：最大で東西幅120m程度か。
　3）飛鳥川西岸：甘橿丘が迫り、ほとんど平坦地がない。
　4）飛鳥寺西方一帯：どのようが性格の場所として利用されたのか。
3、利用の仕方：『日本書紀』（以下『書紀』と略す）の記載と考古学の成果から探る。

＜飛鳥寺西方一帯の様子＞

A、『書紀』が記す飛鳥寺西方一帯のこと

1、「飛鳥寺西の槻樹」「飛鳥寺西」「甘橿丘東の川上」と場所を明示して度々登場：
　1）登場時期：皇極3年(644)正月～持統9年(695)5月21日までの50年間。計12度。
　2）意義：一帯が朝廷にとって、大変、重要な役割をもつ場所であったことを示す。
　3）飛鳥寺西の施設の広がり：相当に広い、広場状の空間。
　　①壬申の乱の時：軍営を設置。仮設的なものだが、囲いを備えたか。
　　②天武11年(682)7月27日条：隼人を飛鳥寺西で饗宴。種々の楽を起こし禄を賜る。
　　道俗(出家人と俗人)ことごくこれを見る。
　　③持統2年(688)：槻樹の下で、蝦夷の男女213人を饗宴。
2、利用時期：皇極天皇、斉明天皇、天武天皇、持統天皇の時代。
　1）この間：二度、都が飛鳥を離れる。
　2）継続使用：天皇の代替りで宮殿が遷っても、同じ性格の場所として継続使用。
　　①遷都により飛鳥の宮殿が一時中断した後も：再度、同様の性格の場として使用。
3、記事に登場する二つの重要な要素：大槻(ケヤキの一種)と須弥山(像)。
　1）皇極朝、天武・持統朝・・・大槻。
　2）斉明朝・・・・・・・・・・須弥山(像)。
　3）今泉説：時期によって、中心となるものや、場所が変化したと見る。
4、飛鳥寺西一帯で行われた行事の内容：
　1）来朝した夷狄・辺境の民などに対する饗宴・・・8例。　大きな比重。
　　①夷狄・辺境の民とは：蝦夷・粛慎、隼人・種子島人・トカラ人。
　2）天皇に対する群臣の誓約　　・・・1例。
　3）盂蘭盆会(饗宴と一連)　　・・・1例。
5、飛鳥寺西一帯：大槻や須弥山像があり、来朝した夷狄・辺境の民を饗宴する儀礼場
6、蝦夷の毎年の朝貢：斉明朝に始まる。
　1）『書紀』に見る蝦夷に対する行事の内容：饗宴・賜物・授位が行われる。
　2）饗宴・賜物・授位を行う場所：時代により変化。
　　①皇極朝～斉明4年：朝堂、朝庭を使用。
　　②斉明5年以降：飛鳥寺西で行う。
　　③8世紀以降：朝堂で行う。正月節日の饗宴に列席し、賜禄、叙位にあずかる。
7、隼人の毎年の朝貢記事：天武11年7月が最古。
　1）7世紀後半の奏楽・饗宴・賜禄の行事の場所：飛鳥寺の西。蝦夷と同じ場所。
　2）8世紀以降：大極殿・朝堂を用いる。
8、新羅使の朝貢儀礼：7世紀にも大極殿・朝堂の前身である内裏・朝堂を用いる。
　1）今泉説：蝦夷・隼人と異なり、新羅は飛鳥寺西を使うことはないと見る。

9、蝦夷・隼人・新羅などの朝貢：服属集団、服属国が天皇に対して、忠誠を誓約する服属儀礼。
1）朝貢に対して：必ず饗宴を伴う。両者は一体的なもの。
2）意義：服属の証としての朝貢に対して、天皇が恩恵として饗宴と禄物の賜与、冠位授与を行う。これによって、支配と服属の関係が明確化し、強化される。
10、『書紀』の飛鳥寺西での記事：夷狄・辺境の民に対する服属儀礼の一駒。
1）飛鳥寺西一帯：朝廷付属の服属儀礼を行う場。朝貢に対する饗宴場。

B、二つの重要な要素－大槻・須弥山(像)－の性格と意義

1、大槻：ケヤキの一種。
1）乙巳の変後の群臣の誓約：大槻の下で行い、「天神地祇に告ぐ」とある。
①大槻：神々が依ります聖樹。神々の下で天皇への忠誠の誓約が行われている。
2）大木：宗教的な意義が求められ、神が降臨する聖樹と見られた。槻はその代表。
3）『今昔物語』巻11－22：「推古天皇は元興寺の堂を建てようとして、そこにあった槻の巨木を切らせたところ、祟りがあり、斧を入れた者はたちまち死んだ」
①槻の巨木：「飛鳥寺西の槻木」のこと。
②『今昔物語』の伝承：槻の聖樹としての性格を基礎として成立。
③「槻」：『今昔物語』が成立した12世紀前半頃にはなくなっていたか。
4）『延暦僧録』：わが国最初の僧伝。延暦7年(788)、唐僧思託の撰。仏教が伝来して以来、延暦年間までの僧・信者らの伝記を編記。
①「飛鳥寺の槻木」：「従三位」の神階が授けられる。
5）飛鳥寺西の槻の性格：巨木で、神が依ります「斎槻」(聖樹)。
6）槻樹下と周辺：広い広場状の空間が存在。「斎槻」のある「神聖な場」。
7）「斎槻」下での国家の重要な誓約：犯すことの許されない神聖な誓約。
①蘇我氏滅亡後：天皇・皇太子への忠誠を誓約させる儀礼。
8）大槻の聖樹下での饗宴・服属儀礼：神聖で、違うことの許されない誓約。
2、須弥山(像)の造立：斉明3年、5年、6年の3度登場。蝦夷などの饗宴の場に造立。
1）須弥山とは：仏教の宇宙観でいう、世界の中心に聳える「聖なる高山」のこと。
①四方を海に囲まれた中央に聳える。
②仏法の守護神である帝釈天・四天王・三十三天の諸天が住む。
2）飛鳥時代支配者層の須弥山観：
①斉明3年7月15日の記事：盂蘭盆会を行う。仏教的意義を認めていたことは確か。
3）須弥山(像)造立の意味：聖なる山を象形して、その場を「聖なる舞台」に整える。
4）聖樹大槻との関係：相互にその意義を高め合う。
3、『書紀』の記事から窺える7世紀中頃の飛鳥川西一帯の構造と行事の内容：
1）聖樹大槻があり、「石上池」があり、聖山須弥山(像)が造立された場。
①神が代り坐す「斎槻」や、諸天が坐す須弥山がある場：神聖な呪術的場。
2）そこで行われた饗宴・儀礼の性格：神聖な饗宴・儀礼。
①饗宴と同時に行われた行事：種々の楽舞を奏し、冠位・下賜物を授与。
3）隼人の風俗歌舞奏上、相撲の意味：歌舞の形での服属の誓約を意味。
4）行事の意味：夷狄・辺境の民を対象とした饗宴。彼らに対する教化策の一駒。
4、飛鳥寺西での饗宴・服属儀礼：諸天あるいは神々を媒介とした呪術的性格のもの。
1）神々を前にしての饗宴：神と人との共同飲食「直会」を伴ったもの。
2）饗宴を賜与する意義：天皇と夷狄との、支配と服属の関係を、諸天と神々とを媒介として、誓約し固定化する。
5、皇極・斉明・天智(大津遷都以前)・天武・持統の各天皇の代替わりとの関係：
①宮殿：飛鳥盆地内で造り替えられる。
②飛鳥寺西一帯：朝廷の「服属儀礼」の場として、一貫して機能し続ける。
6、詳細な位置・配置・構造・規模などの具体像・時期的変遷：『書紀』の記事のみからは、明らかにできない。発掘を通して明らかにしていくしか方法がない。

＜飛鳥寺の創建と変遷、寺域の変遷＞

A、創建－蘇我馬子の発願(対物部氏、戦勝記念の寺)－

1、『書紀』崇峻元年(588)：飛鳥衣縫造祖樹葉の家を壊して「法興寺」の造営開始。

1）推古4年(596)11月：「法興寺」造り終える。

2）推古13年(605)4月：銅・繍の丈六仏像各一躯の造像を詔。鞍作鳥を造仏工とす。

①推古14年(605)4月：金銅仏・繍仏完成。丈六金銅仏を中金堂に安置。

2、飛鳥寺の性格：蘇我氏の氏寺。仏法元興の寺。仏教興隆と、僧尼統制の拠点寺院。

1）蘇我本宗家滅亡後：国家寺院として重きをなす。

①天武9年(680)4月：官治の寺を制限。飛鳥寺は仏法元興の由緒によって、官治の寺に加えられる。

2）天武14年(685)：天皇の病気平癒を祈り大官大寺・川原寺・飛鳥寺三大寺で読経

3）持統朝・文武朝：藤原京四大寺(大官大寺・薬師寺・川原寺・飛鳥寺)。

4）養老2年(718)9月：平城京左京五条七坊に移転。元興寺。

①飛鳥：中金堂・塔・講堂などの主要堂塔は残存。本元興寺として宗教活動を継続

3、発掘成果にみる飛鳥寺の造営：7世紀初頭までに伽藍中枢部は完成。

1）中金堂・塔・回廊：6世紀末に造営。

2）東西金堂：これらにやや遅れて完成。

3）講堂：所用瓦から、6世紀末ないし7世紀初頭の造営と判明。

4、寺域とその変遷：

1）南限と南方：南門、その東西に取り付く築地塀。南門から南に延びる石敷参道。

2）西限：西門と、その北に続く瓦葺掘立柱塀。

3）北限：北門とその東に続く瓦葺掘立柱塀。東北隅。

①北限塀の北：1、5mに幅2、4m、深さ1mの東西溝(外堀)。東北隅で内堀を検出。

②東限塀：北限塀と98°の鈍角で折れる。

4）東南部：掘立柱塀と飛鳥池遺跡とを分ける道路。

5）寺域の範囲：南北約293m、北辺東西幅約213m。築地塀・掘立柱塀は瓦葺屋根。

5、寺域を限る塀の造営時期：

1）北限塀：外堀出土の瓦から、主要堂塔に大きく遅れずに完成。奈良時代後半まで補修しつつ存続。

2）東北隅の北限塀の内堀：6世紀末～7世紀初頭の土器、平瓦。創建期まで遡る。

3）北限塀・東限塀・西限塀：柱穴に重複関係がない。創建以降、同位置で存続。

4）南限築地塀：8世紀初頭に改造されたもの。位置は創建以来不変。

6、南参道：南門前の中央を真南に幅2、3mの石敷参道が約30m延び、石敷広場に至る

1）参道・石敷広場の交点と北限塀までの距離：324m＝3町分。

2）石敷広場：30cm大の川原石敷。南北幅20、5m、東西長70m以上。

①南北両端：縁石を並べて仕切る。

②南側縁石の南：一段低い幅0、8mの犬走状石敷。

③その南：幅0、7m、深さ0、2mの石組溝。

④全体幅：22、2m。「道路」とした場合も、人々が集まることのできる広さ。

⑤主軸：飛鳥寺中軸線・参道に対して、西で北に約8°振れる。

⑥石敷面：南北はほぼ水平。東西は東に高く、西に緩く傾斜。

3）参道と石敷広場の交差部分：幅3、7m。石敷を施さない。縁に南北に石を並べる

4）参道・石敷広場の時期：下層から7世紀前半の土器・瓦が出土。

①設置時期：7世紀前半以降。7世紀を通じて存続。

②石敷広場の南：東から西に延びる土管暗渠(7世紀後半)。

＜飛鳥寺西一帯の発掘は何をもたらしたか＞

A、飛鳥寺周辺の発掘

1、飛鳥寺西門の発掘：1956年。位置・規模が判明。

1）西門：南北3間(11、3m)、東西2間(5、3m)。南門(8、8m×4、6m)より大。

①南門より大きい理由：飛鳥寺正門的。「飛鳥寺西の槻樹」「中ッ道」の存在と関係か
2）西門の造営時期：創建期の瓦がなく、新しい瓦が集中。
①北に接続する西限の掘立柱塀：創建期の造営。西門も6世紀末～7世紀初頭の創建
2、飛鳥寺東南部の発掘：倉庫、暗渠、石組溝などの遺構群。

B、飛鳥寺西方一帯の発掘
1、西門の西方一帯：建物のない空閑地が広がる。
1）石敷・礫敷・瓦片敷などで舗装した広場：飛鳥川に向って、段々に低くなるように敷きつめて造成。
2）遺構：石組溝・掘立柱塀・石敷・土管暗渠など、大半が南北方向に延びる。
①西門の西南方からの石組溝：飛鳥坐神社への村道の南まで及ぶ。
2、飛鳥京第11次調査(橿考研)：西門の西25m。「入鹿首塚」の南隣接地。石敷A・石組大溝A・石組溝Bなどを検出。
1）石敷A：五輪塔のすぐ東を南北に延びる。東西両端に西に面を取る縁石。間に20cm大の川原石を敷き詰める。幅4、4m、南北長約34mを確認。発掘外に続く。
①東縁石の東：石敷面より10cm高い。
②西縁石の上端：石敷面と面が揃う。縁石の西には、一段低い砂利敷・石敷面。
③石敷：東から西へ段差をもって築く。
④「中ッ道」説：道路説は不成立。
⑤時期：上層に7世紀の遺構がない。持統朝まで存続か。
2）石組溝B：石敷の東6mを石敷Aに平行して南北に延びる。幅0、5m、深さ0、1mの浅い溝。両岸に20cm大の川原石を立て並べ、底に小礫を敷く。北流。
3）石敷と石組溝の間：石敷が部分的に残る。全面石敷と復原できる。
4）石組大溝A：石組溝Bの東9m、飛鳥寺西門前。西門中心線の西9m。南北溝。
①規模：幅1、2m、深さ0、35m。
②両岸：0、5～1、0m大の川原石を横に並べ、底は20cm大の川原石を敷く。
③下層：底に黄色砂が堆積。北流。上層は、瓦・小礫を含む埋土。
④西側側石上端：東側側石上端よりも6cmほど低い。西側は一段低い石敷面。
⑤性格：飛鳥寺の西側外溝を兼ねるか。
3、飛鳥寺西門部の調査(奈文研)：
1）西門の基壇西縁の南北石列と基壇積土：縁石(高さ0、5m、長さ0、8m、厚さ0、2m)
2）石組大溝A：飛鳥寺西限塀に沿って南北120m以上にわたって延びる。
①石組大溝Aの造営時期：裏込土出土瓦・土器から7世紀中頃以降。
3）石組溝B：南北26m以上。
4）南北素掘溝：石組大溝の西5m。土管を埋めた溝(土管暗渠A)。
5）柱穴：石組大溝Aの底のすぐ西側にある素掘り溝の底で発見。
①柱穴：一辺1、2m以上と大型。南北掘立柱塀A。
6）遺構群の時期区分：2～3時期。
4、西門北方の調査(奈文研)：西門の北15m付近。
1）南北掘立柱塀A：石組大溝Aの西1m、飛鳥寺西限塀の西11m。南北5間分を発見
①柱間距離：約2、3m。南北長20間(48m)以上に及ぶ。
②抜取り穴：黄褐色土で丁寧に埋める。
③石組大溝Aとの関係：石組大溝Aが柱穴を破壊。掘立柱塀が古い。
2）土管暗渠：石組大溝の西4mを南北に延びる。
①土管：長さ40cm、径20cm、厚さ2cm、玉縁長15cmの玉縁付き瓦状土管を、玉縁を北にして連結。計21本。南北長10m分を確認。
②土管内埋土：細かい粒の粘土が厚く堆積。使用不能となって廃棄。
③土管の埋設：幅1、5mの溝状掘方を掘り、その底に配列。
④西門西方：据付け掘方を検出。土管は南北52m以上にわたって延びる。
⑤時期：7世紀後半。石敷A・石組大溝Aなどと併存か。

5、西門の北60m地点：
1）西限塀から西へ40～60m：全面やや乱雑な礫敷・瓦片敷。以西は氾濫原。
①縁石：西限塀から西へ58m。50cm大の石を横にして西側に面を揃えて並べる。
②縁石の西側：20cmほど低い面に礫敷・瓦片敷。
③礫敷・瓦片敷の時期：上層に顕著な遺構がなく、藤原宮遷都頃まで存続か。
6、西門の北90m地点：
1）土管暗渠を埋設した南北素掘り溝：西限塀の西約13m。南北106m以上延びる。
7、西門の北110m地点：大字飛鳥の東西村道(飛鳥坐神社に向かう道)のすぐ南。
1）西限塀の西15m～23mの間：全面に拳大の礫敷。西へ20cm傾斜。段築はない。
2）西限塀から西へ約100m地点：10～30cm大の川原石が散乱。礫敷面の名残か。
8、飛鳥京第77次調査(橿考研)：飛鳥寺西門の西方約65～105m。小字「土木」。
1）現飛鳥川からの距離：約95m東。発掘区以西は、氾濫原。
2）小字「土木」：末永雅雄が「槻樹」があった可能性を指摘。
3）7世紀の遺構：発掘区の東端8m間に残存。石組溝、石列、砂利敷、柱列状遺構等
①石組溝：西側に位置。幅0、9mの浅い南北溝。西岸に10cm大、東岸に30cm大の川原石を並べる。
②石列：石組溝の東0、6mの南北石列。40cm大の川原石を西に面を揃えて並べる。
③石列の西側：その下端から、石組溝東岸石の上端につながる礫敷。
④石列の東側：石列を縁石として東側に砂利敷。その東は3cm大の小砂利敷。
⑤砂利敷・礫敷：飛鳥川に向かって段差をもって設けられる。
4）石敷・石列：飛鳥寺西門付近と同じ方位・工法。西門の西方約70mまで及ぶ。
5）「槻樹」に関する成果：なし。
9、2009年の調査(明日香村)：飛鳥寺西門の南約70m。飛鳥寺西限の西側の水田。
1）発見遺構：石組大溝A、石敷・バラス敷、土管暗渠A、南北掘立柱塀A。
2）石組大溝A：南北溝。幅約1、2m、深さ0、15m。底石敷(10cm大)。
①石組大溝A：総延長南北110m以上。
3）石敷：石組大溝Aの西方。10～20cm大の川原石を東西幅5、2mで敷き詰める。
①石敷：南北約70m以上。北方の礫敷を含めれば、南北160m以上。
4）土管暗渠の掘方・方位：幅1、6m、深さ約1m。南でやや東に斜行し始める。
①土管暗渠A：総延長南北160m以上。
10、2011年の調査(橿考研)：飛鳥寺の西門の西約100m。水路の改修工事に伴う調査。幅3m、南北長280mのトレンチ調査。
1）飛鳥寺西門の西110m：10～20cm大の石による石敷(南北2、4m、東西0、8mの範囲)
①北端：石を横に立てた縁石。飛鳥寺に向かう東西通路か。南は砂利敷。
2）飛鳥寺の南西200m地点：バラス敷(南北5、5m以上、東西3m以上の範囲)。
3）飛鳥寺の北西180m地点：東西石組溝の底石。飛鳥寺南の石敷広場と直交。
11、飛鳥寺西門西方の南北約200m間の状況：建物を欠く。大きく2時期。
1）7世紀前半：南北掘立柱塀A。
2）7世紀中頃以降：石組大溝A・石組溝B・土管暗渠A。飛鳥川に向かって段々に敷き詰めた石敷。
①広場状空間：西門付近を中心とする南半は丁寧な石敷。北半は礫敷・瓦片敷。

＜水落遺跡・石神遺跡の発掘＞

A、飛鳥坐神社に向かう村道の北側地域

1、石神遺跡の南方70m：飛鳥寺西限塀の西20m～35m地点。東西トレンチ調査(1m)
1）遺構：南北に長い掘立柱建物と、基壇東側の丁寧な石敷面(30cm大の川原石)。
①基壇：均質な黄色粘質土の積土。石敷面よりの高さ20cmが残存。
2、飛鳥坐神社に向かう村道の北側：建物が立つ。

B、水落遺跡

1、位置：飛鳥寺西北端の西80m。昭和56年～発掘調査。

2、水落遺跡の性格：『書紀』斉明6年(660)5月条の「皇太子(中大兄皇子)初造漏刻、使民知時」(11文字)とある水時計と水時計台の遺跡。

1）水時計台建物の一郭：南北を東西塀で画した一郭に時計台と掘立柱建物群が建つ

①北限の掘立柱大垣：東西塀SA600。東西100m以上にわたって延びる。

②性格：水落遺跡の一郭の北を画し、また石神遺跡の南を画す塀。

③水落遺跡の一郭の規模：南北65m、東西80m、面積5000㎡ほど。

2）建物：水時計台建物、その東西南北を掘立柱建物群(長大な建物と方形建物の計8棟)で囲む。水時計台建物の東北方にも長大な東西棟掘立柱建物。

①建物間の空間：全面石敷舗装。

3）建物群・石敷舗装：超一級の規模・内容。企画性の高い配置構成。

3、8世紀初頭に確立する律令制下の「陰陽寮」の仕事：計時・報時、陰陽(占い)、暦、天文のことを担当。

1）水落遺跡の一郭の性格：「陰陽寮」であった可能性が高い。

4、水時計建物の東南方：四面廂付東西棟建物と、その東で南北棟建物を検出。

1）建物外：石敷舗装。その他、石組溝、木樋暗渠なども検出。

C、石神遺跡

1、位置：水落遺跡の北接地。飛鳥寺西北隅の西北方。小字「石神」。

2、明治35年(1902)：「須弥山石」「石人像」の石造物を発見。

3、昭和56年以来：継続発掘を実施。

4、時期区分：斉明朝(天智初期を含む)、天武朝、持統朝(藤原宮期)の3時期区分。

1）斉明朝の遺構：3時期に細分。水落遺跡と同時期のA3期が最盛期。

5、最盛期の石神遺跡の構成：長廊状建物により、東区・西区に区分。

6、東区：南限大垣のすぐ北は、建物のない「広場」状施設。

1）広場：南北40m、東西50m程。西部を石敷、東部をバラス敷で舗装。

2）大井戸：広場の北端に位置。斉明朝～天智朝の初め頃。

①石組・石敷の洗い場：一辺5、3mの方形。深さ0、6m。周囲に大石を立て並べる。

②井戸枠：断面弧状の厚板(杉材、厚さ18㎝)を、縦に二枚組合せる。

③性格：宮廷儀礼などで使う「霊水」を得る「聖なる井戸」。

3）井戸の東西：東西棟掘立柱建物が建つ。

4）石組溝・石組暗渠：幅0、5m、深さ0、5m。洗い場の北から北方へ延びる。

5）大井戸北方の建物群：4棟の大型建物で四角に囲んだ一郭。大火災で廃絶。

①建物群による区画の規模：南北49、4m(高麗尺140尺)、東西24、7m(同70尺)。

②区画内の建物：正殿状建物(南北棟、四面廂付建物)と前殿状建物。

③全体構成：6棟の大規模建物が、屋根を接するように建ち並ぶ。

④建物群の外側の周囲：全面石敷舗装。

6）西区の北を限る東西棟建物(大垣から北へ120m)以北：建物が急減。倉庫など。

7）北限：大垣から北へ180mに東西石組溝と東西通路があり、北限となる。

7、西区：東を長廊状建物、北を東西棟掘立柱建物で囲む一郭。

1）長廊状建物：南北45間(総長82m)以上、東西2間。高さ0、3mの低い基壇上に建つ

①南限大垣SA600～長廊状建物の北端の距離：111m。柱間2、47m等間。

②性格：西区の東側を限り、東区とを区分。

2）東西棟掘立柱建物：長廊状建物の北1間分離れて建つ。南北2間、東西6間以上。

①性格：西区の北を限る建物。長廊状建物と一体的。

3）西区の規模：東西70、8m(高麗尺200尺)、南北106m余(高麗尺300尺)。

8、西区の構成：南半分と北半分とに2区分。大火災で廃絶。

1）南半分：東西棟大規模建物が密集して建つ。

①南端の建物群：掘立柱建物を東西に3棟を配し、西区の南を限る。

②水落遺跡から続く2組の木樋暗渠、小銅管、木樋暗渠から水を汲み上げる桝：
③南端建物の北方：全面石敷。東西幅20m余。南北16m以上の広場状空間。
2）大型建物SB1900：南限大垣SA600の北40m。
①四面廂付建物：桁行9間(22、3m)、梁行5間(10、8m)。柱穴は身舎一辺1、8m、深さ1、2m。廂一辺1、2m、深さ0、7m。円柱(径30cm)。
②性格：西区の「正殿」。建物の前面や周囲の全面を石敷。後に礫敷に改める。
3）西区北半部の遺構：小面積の発掘。大規模な四面廂付建物と周囲の石敷。
①巨大な柱穴：身舎柱穴一辺2m。廂柱穴一辺1、3m。
②建物周囲：全面丁寧に石敷舗装。
4）西区建物の特色：
①正殿：建物の東西の中心を、西区画の東西の中軸線に合わせて建つ。
②南北の位置：南限から高麗尺100尺。西区画の南北長の南から1／3の位置に建つ
③規模、内容：石神遺跡最大。最高の格式をもつ建物。石神遺跡の中心建物。
5）西区画の建物配置：非常に高い規格性を持ち、高い計画性で造営。
9、東限の掘立柱塀と門状施設の発見：東西幅約130m。その東に南北道路(幅15、6m)

D、石神遺跡の一郭の性格

1、遺構群の特色：宮殿の中心部に匹敵する規模、格式。高い計画性による造営。
1）建物周囲の入念な石敷舗装。石敷広場の存在。
2）特異な大井戸と導水路の存在。
2、性格を知る手がかり：「須弥山石」と「石人像」の出土(明治35年＝1902)。
1）出土地：南限大垣北方の石敷広場状施設の東端。
2）発掘成果：平安時代以降に一括廃棄したことが判明。本来の造立地も遠くない。
3）石造物の用途：ともに噴水装置。庭園に置かれた水飾の一種。
3、「須弥山石」：ダルマ形。山形と波形を浮彫り。
1）内部から流れ出る水が波形を濡らす：大海に囲まれた高山「須弥山」を表現。
2）『書紀』斉明紀に3度登場する「須弥山(像)」のいずれかに相当。
3）斉明6年5月条：中大兄皇子の漏刻初造記事に続いて、「又、石上池の辺に須弥山を作る。高さ廟塔の如し。以て粛慎47人に饗たまう」。
①「石上池」の場所：小字「石神」付近。天理市布留「石上」説は不成立。
②同月条の2つの記事：「漏刻」と「石上池辺の須弥山」は密接に関わる施設。
4、水落・石神遺跡一帯：飛鳥寺の西北方で、飛鳥川の川辺。
1）『書紀』に度々登場する「饗宴場」との関連が注目されてくる。
5、水落遺跡から北へ延びる小銅管：清浄な水を流す通水管。
1）行先：石神遺跡へ。「特殊な水カラクリ」があり、小銅管はそこへの導水・通水管
2）「須弥山石」や「石人像」：噴水装置。この「特殊な水カラクリ」の有力候補。
6、水時計と水カラクリ：密接に関係する一連の施設。斉明6年5月条に相応。
7、石神遺跡：噴水石があり、さらに「石上池」と呼ばれた園池もあったか。
1）その性格：水時計施設の一郭とは違った構造。違った目的・用途の場。
①「石敷広場」「噴水施設」「園池」の存在：一郭は「饗宴場」。
2）饗宴場であることを裏付ける遺物：東北日本産の黒色土器(蝦夷の土器)の出土。
①出土地点：東区画、西区画ともに出土。天武朝頃の遺物包含層出土。
②東北日本産食器出土の意義：「蝦夷」が故郷から持ってきた土器を使って飲食が行われたことを示す。「蝦夷」などに対する饗宴が行われたことを示す物証。
3）新羅焼の細頸壺の優品や百済産獣脚硯の出土。

E、飛鳥寺西一帯の全体構成

1、従来の理解：広場状の空閑地が広がる単純な構造のものとされてきた。
2、発掘の結果：機能を異にする、いくつかのブロックに分かれていたことが判明。
3、飛鳥寺西一帯の構成・内容：

1）南部：朝廷の公的儀礼、夷狄に対する饗宴などを行う“広場”が広がる。
①儀礼の広場の象徴：「大槻の聖樹」がある。
2）北部：水時計建物、陰陽寮的官衙(役所の施設)を設ける。
3）北西部：格式の高い建物群、園池、広場、噴水施設などが整備された饗宴・服属儀礼の施設を設ける。
①正殿的建物SB1900：服属儀礼に際して、斉明天皇や中大兄皇子が出御する建物。
4、公的広場としての利用の開始：大化改新のクーデターの直前から始まる(『書紀』)
1）この時期：南部は石敷で舗装した広場状空閑地になっていた可能性がある。
①水落・石神遺跡付近：まだ十分に整備されていない。
5、斉明朝(655～661)：状況が一変。
1）飛鳥寺西北方の一帯：大規模な造営が行われる。
①水落遺跡：水時計建物、陰陽寮的施設が造営、整備される。
②石神遺跡：大規模建物群、石敷等による饗宴・服属儀礼施設が整備・拡充される
③整備・拡充の時期とその内容：『書紀』に、飛鳥寺西一帯が頻繁に登場する時期と合致。内容も相応。宮殿の付属施設としての性格を明確にしていく。
2）飛鳥寺西門付近：広場状空閑地として存続。
6、天武朝：
1）飛鳥寺西門付近：広場状空閑地として存続。
2）水落遺跡：水時計建物、陰陽寮的施設が廃絶。新たに建物群を造営。
3）石神遺跡：大改造。建物群、石敷、石組池などによる饗宴の場として継承。

F、飛鳥寺西に水時計施設を設けたのは何故か？
1、『書紀』の記事と、発掘成果に見る飛鳥寺西一帯の性格：
1）朝廷への忠誠を誓わせる儀式執行の場であり、
2）蝦夷・隼人ら、朝貢してきた夷狄が朝廷へ服属を誓う、服属・饗宴儀礼の場。
→「国土・人民の支配」を象徴する種々の儀式・儀礼が行われる場。
2、何故、水時計施設を服属儀礼を行うのと同じ場所に設けたのか？：
1）「授時・頒暦」：古代中国の政治思想。「日の出」「日の入」は自然の運行だが、これを「時」として管理するのは、天子の「大権」(天子のみに許された権限)。
①天子：国土・領土(空間)と共に、人民の「時」をも支配する。
②頒暦：王朝の交替毎に新暦を造り頒布する。毎年の頒暦。
③元号の制定。
④天子が住み、政治を執る宮殿の正門前：「時計」と「桝」を設置(北京の故宮)。
⑤天子の玉座の両脇：「時計」と「桝」(度量衡統一の象徴)を設置(北京の故宮)。
3、中大兄皇子が水時計を初造した意図：古代中国の政治思想にならい、「時の支配者」たらんと意図した。
1）「領土・空間」の支配を象徴する「服属儀礼」を行う同じ場所に水時計施設を造る。
→そのことによって、「領土・空間」と共に、「時」をも支配するという政治的理念が象徴的に示される。
2）中大兄皇子：中国天子にならい、「時空」の支配者たらんと意図したのではないか
3）服属儀礼の場に水時計施設を建造したこと：皇太子・中大兄皇子を中心とした、蘇我氏滅亡後の朝廷における政治改革の理念が象徴的に示されている。
①蘇我氏の氏寺・飛鳥寺の近くに：水時計施設・服属儀礼の施設を建設、整備・拡充することは、政治的に重要な意義を持っていた。
4、支配者層の理想の世界観：
1）聖樹があり、飛鳥寺があり、園池があり、須弥山像を造り、水時計台を設ける。
→当時の支配者層の理想の世界観・宇宙観が、現出されているのではあるまいか。
2）梁の武帝(502～549年在位)の蓋天説(蓋天的世界観)、「渾天説」、「須弥山説」。

（1）［日本書紀］皇極三年（六四四）正月

（中臣鎌子連）偶、中大兄の法興寺の槻の樹の下に打毬つるに値りて、皮縫の毬の脱け落つるを候りて、懐中に取り留りて、前まみて跪きて恭みて奉る。中大兄、對ひ跪きて敬びて執りたまふ。茲より、相ひ親みして、俱に図ふ所を通ふ。

（2）［日本書紀］大化元年（六四五）六月一九日　三(十九日)乙卯に、天皇・皇祖母尊・皇太子、大槻の樹の下に、群臣を召し集めて、盟曰はしめたまふ。天神地祇に告して曰さく、「天は覆ひ地は載す。帝道唯一なり。而るを末代衰薄にして、君臣序を失ふ。皇天、手を拱に假りて、暴逆を誅し殄てり。今共に心の血を瀝つ。而して今より以後、君は二つの政無く、臣は朝に貳心あらじと無し。若し此の盟に貳かば、天災し地妖し、盟誅し人伐たむ。皎きこと日月の如し」とまうす。天豊財重日足姫天皇の四年を改めて、大化元年とす。

（3）［日本書紀］斉明三年（六五七）七月一五日

須弥山の像を飛鳥寺の西に作る。且、盂蘭盆會設く。萩に観覧通人に饗たまふ。

（4）［日本書紀］斉明五年（六五九）三月一七日

甘樫丘の東の川上に、須弥山を迩りて、隋唐と越との蝦夷に饗たまふ。

（5）［日本書紀］斉明六年（六六〇）五月

又、皇太子、初めて漏刻を造る。民をして時を知らしむ。又、阿倍引田臣、名を闕せり。攻五十餘歳る。又、石上池の辺に、須弥山を作る。西に流れ刻時の如し。以て蝦夷四十七人に饗たまふ。

（6）［日本書紀］天智一〇年（六七一）四月二五日

漏刻を新しき殿に置く。始めて候時を打つ。鐘鼓を動す。始めて漏刻を用ゐる。此の漏刻は、天皇の、皇太子に為す時に、始めて親ら製造れる所なりと、云云。

（7）［日本書紀］天武元年（六七二）六月二九日

是の日に、大伴連吹負、密に留守司坂上直熊毛と議りて、一二の漢直等に謂りて曰はく、「我は詐りて高市皇子と稱りて、數十騎を率て、飛鳥寺の北の路より、出でて營に留まむ。乃ち汝内応せよ」といふ。既にして兵を百済の家に繕ひて、南の門より出づ。先づ桑市熊に報して、馬に乗せて、馳せて、寺の西の營の中に喚くしめて曰はく、「高市皇子、不破より至ります。軍衆多に從へり」といふ。爰に留守司高坂王、及び兵を興す使者穂積臣百足等、飛鳥寺の西の槻の下に據りて營を爲る。唯し百足のみは小墾田の兵庫に居りて、兵を近江に遥ぶ。時に營の中の軍衆、熊が叫ぶ聲を聞きて、悉に散け走げぬ。

2、飛鳥寺西方の関連記事（『日本書紀』）

(8)【日本書紀】天武六年（六七七）二月
是の月に、多禰嶋人等に飛鳥寺の西の槻の下に饗たまふ。

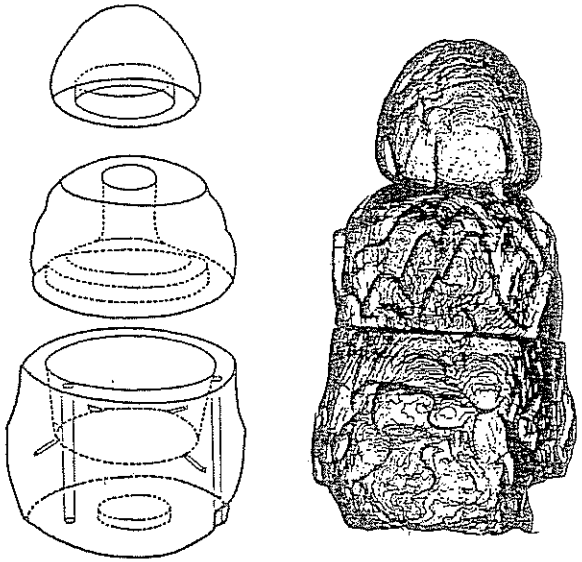
(9)【日本書紀】天武九年（六八〇）七月一日
秋七月の甲戌の朔に、飛鳥寺の西の槻の枝、自づからに折れて落ちたり。

(10)【日本書紀】天武一〇年（六八一）九月一四日
多禰嶋の人等に飛鳥寺の西の河辺に饗たまふ。種種の樂を奏す。

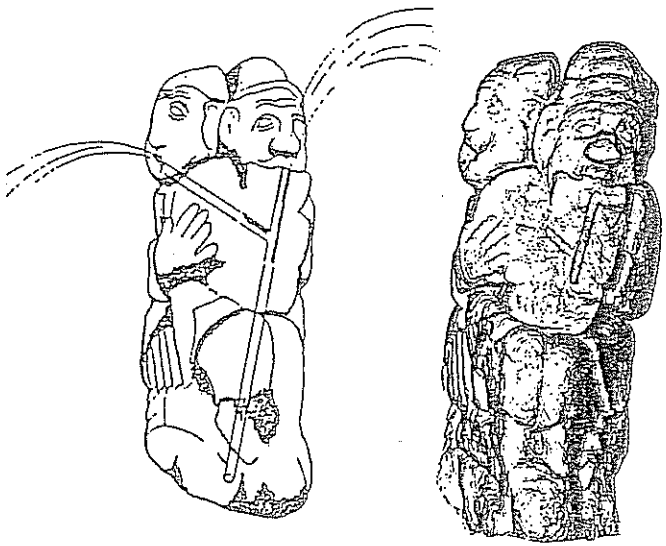
(11)【日本書紀】天武一一年（六八二）七月二七日
蝦夷人等に明日香寺の西に饗たまふ。種種の樂を奏す。仍、祿賜ふこと各差有り。

(12)【日本書紀】持統二年（六八八）一二月一二日
蝦夷の男女二百一十三人に飛鳥寺の西の槻の下に饗たまふ。仍りて冠位を授けて、物賜ふこと各差有り。

(13)【日本書紀】持統九年（六九五）五月二一日
蝦夷の相撲とる を西の槻の下に觀る。



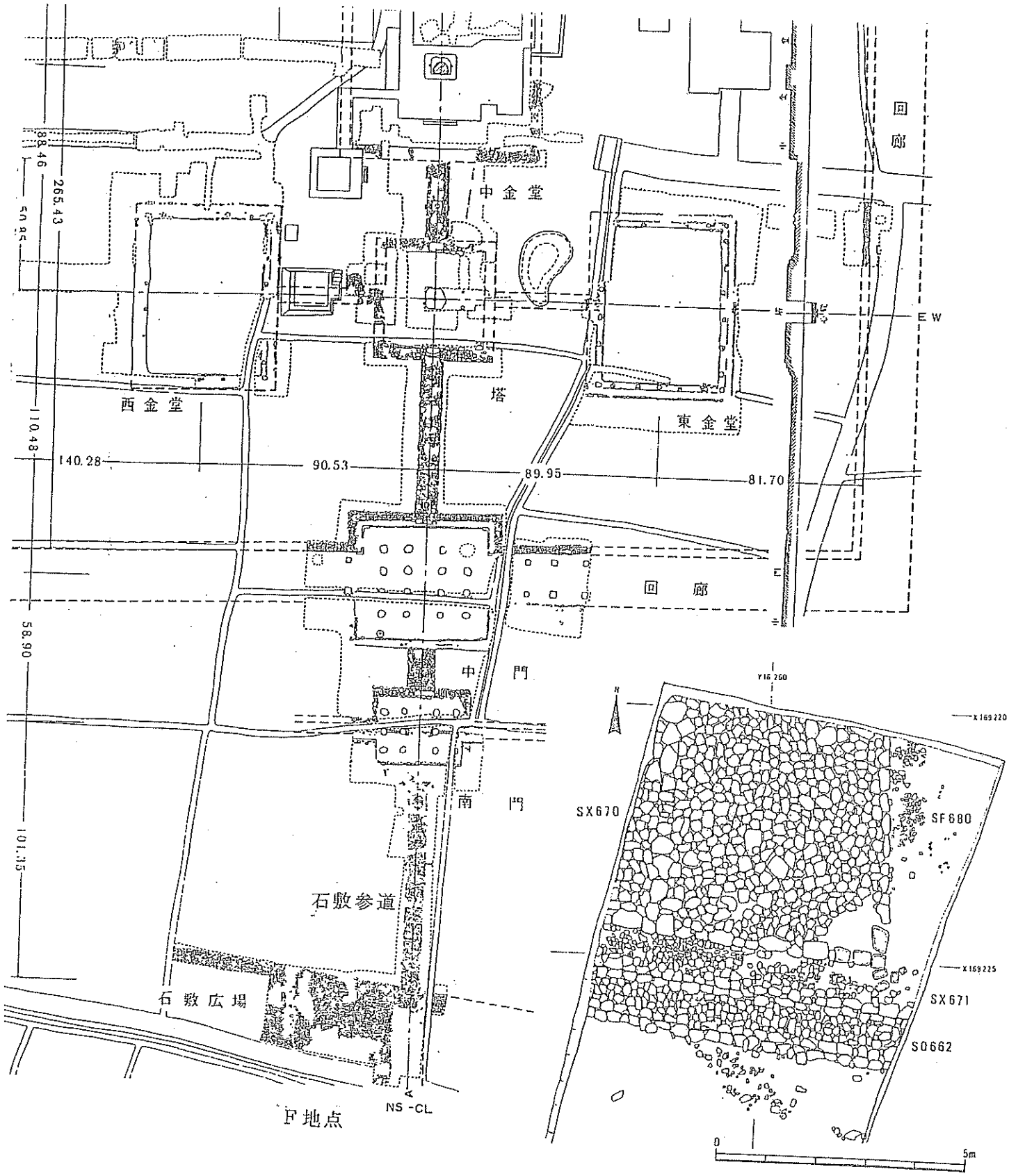
3、石神遺跡出土の須弥山石



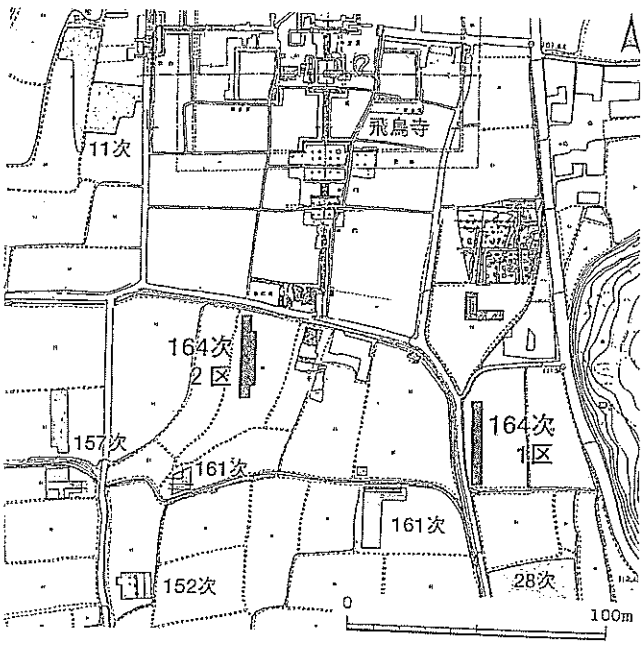
4、石神遺跡出土の石人像

第75－16次
第75－8次
第71－13次
第71－10次
第71－11次
第75－3次
第71－9次
小墾田宮推定地
豊浦寺
石神遺跡
第75－2次
第71－12次
100m

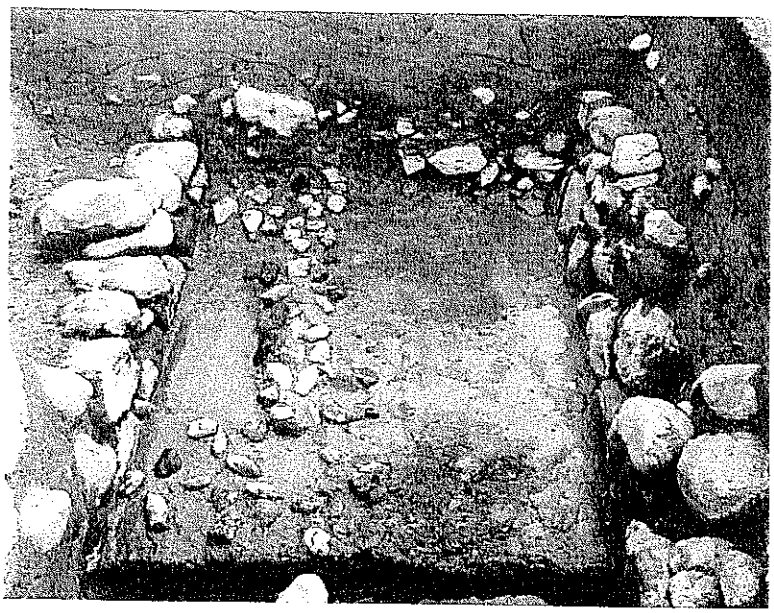
1、飛鳥寺と周辺の遺跡



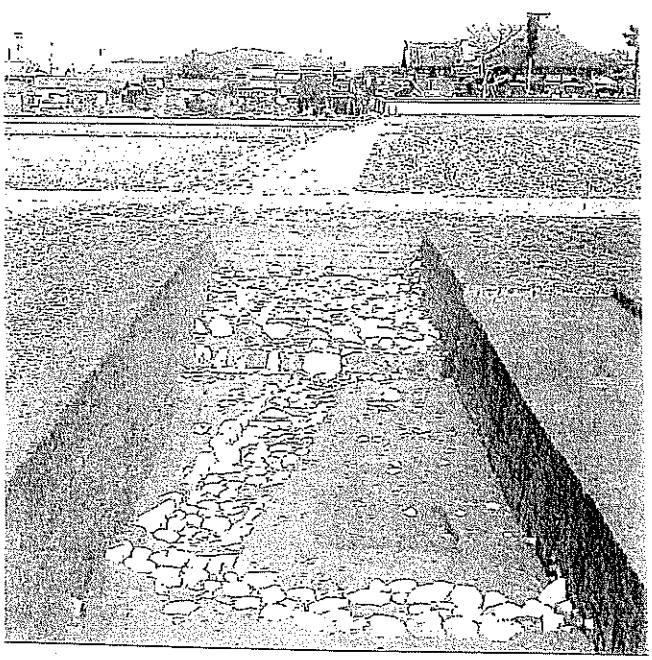
2、飛鳥寺の中心伽藍と南方の石敷広場（F地点）



1、飛鳥寺南方の発掘地点

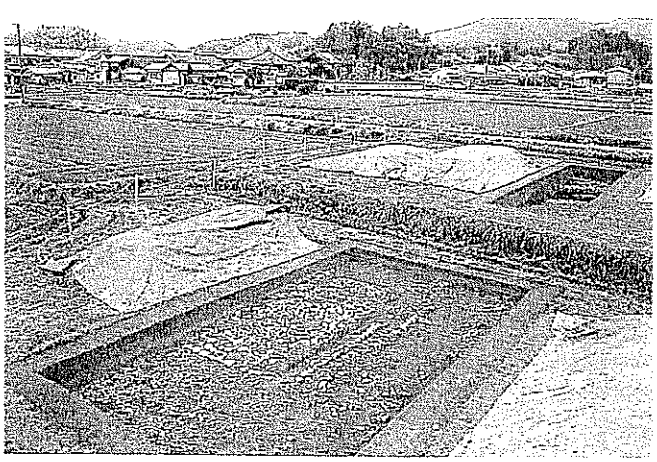


2、飛鳥寺南方の東西大溝(西から)

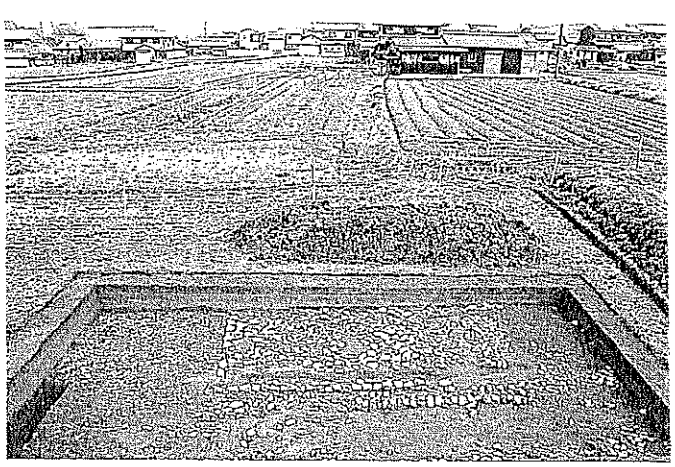


3、飛鳥寺南方の石敷広場(南から)

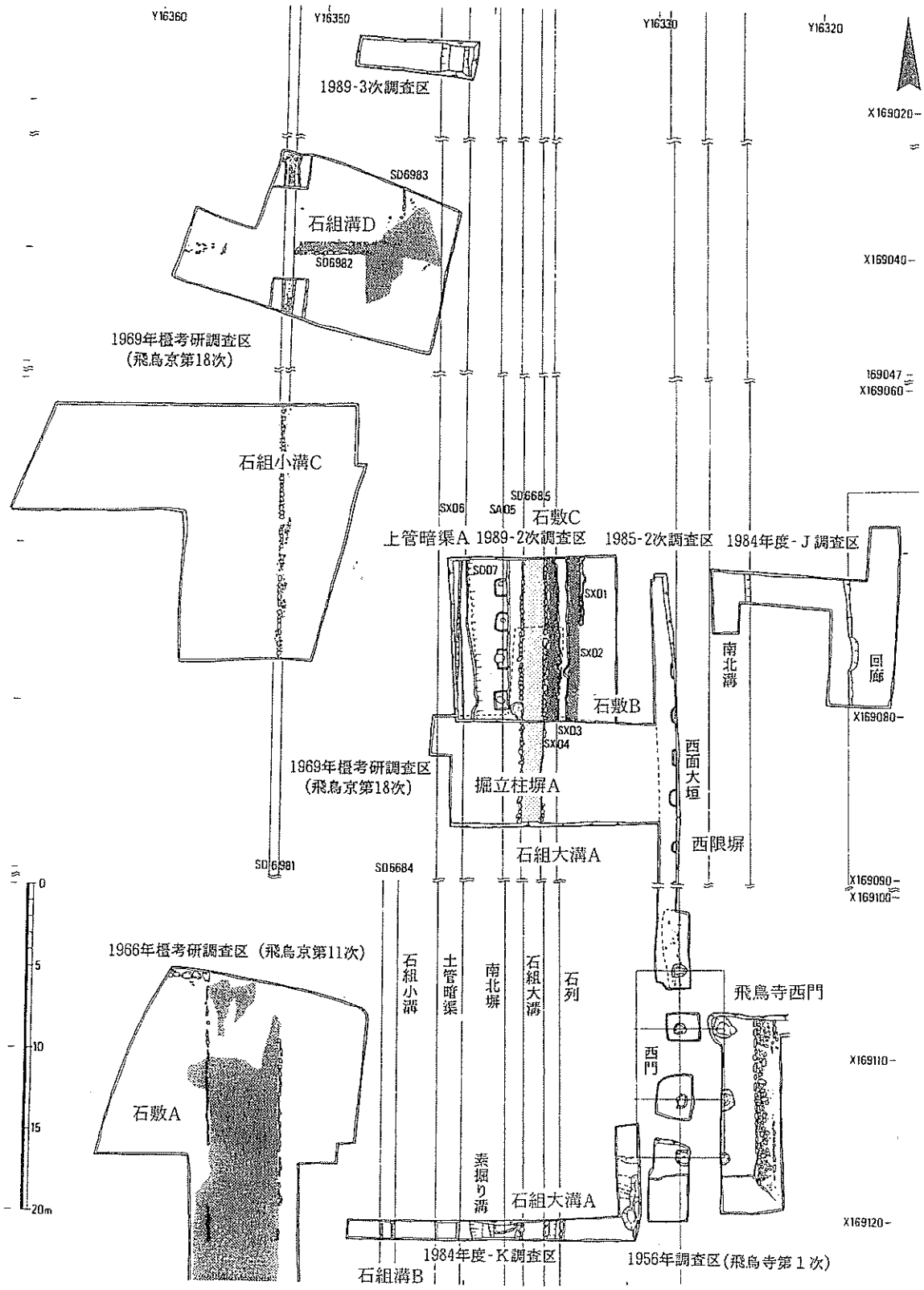
4、飛鳥寺南方の石敷広場(南東から)



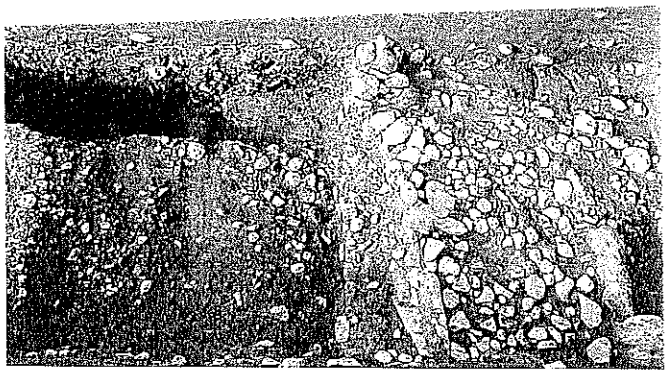
5、飛鳥寺西方の石敷(南西から)



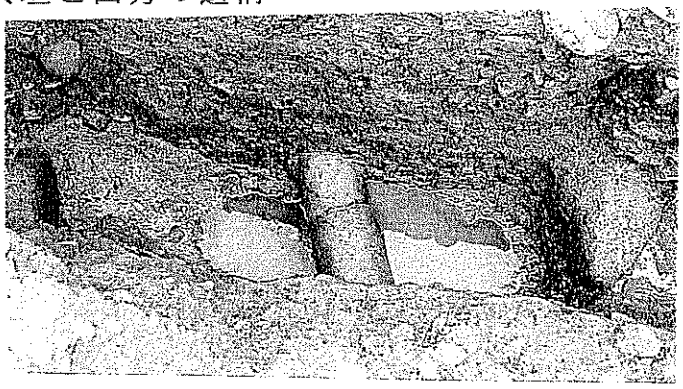
6、石敷跡から「入鹿の首塚」を望む(南から)



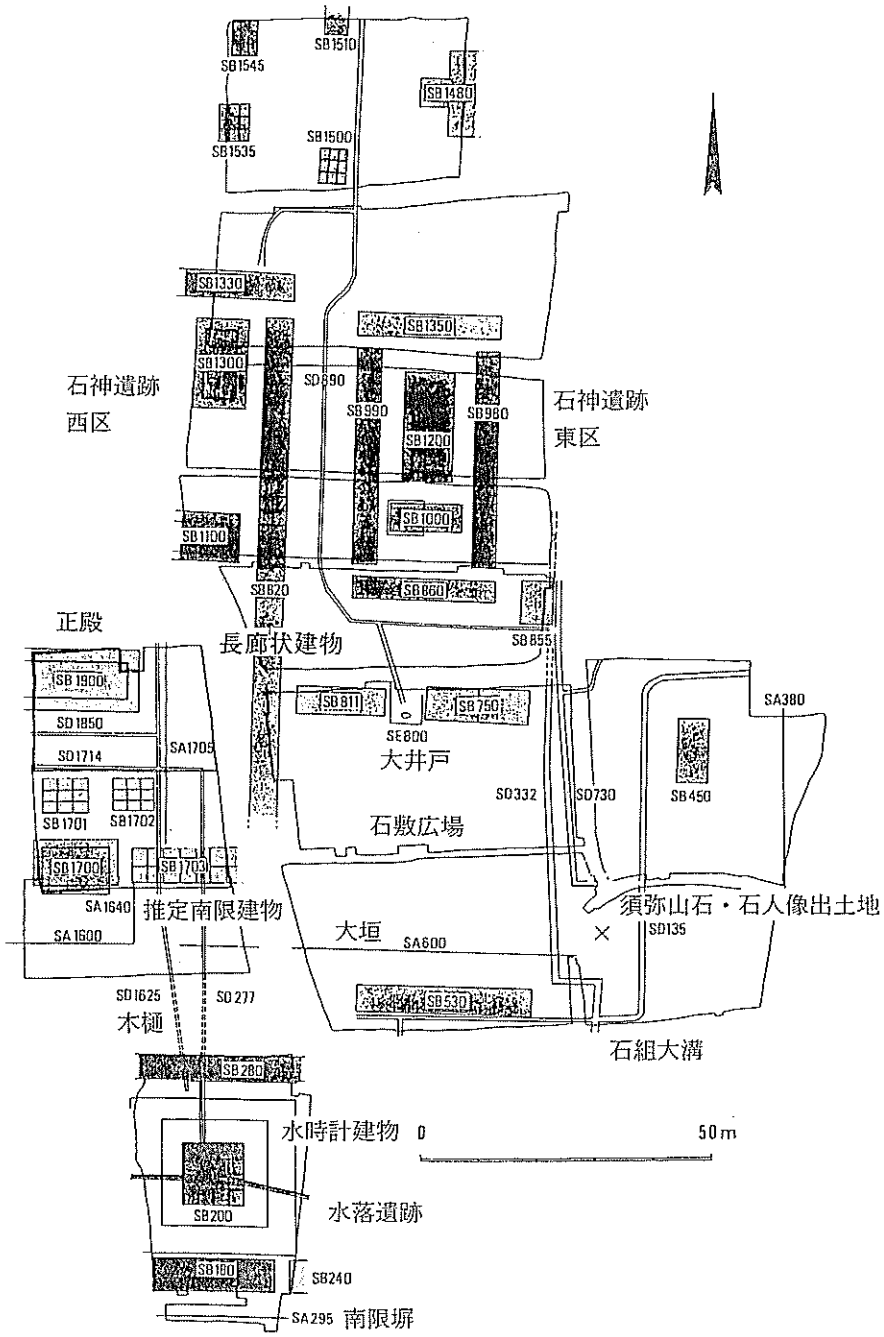
7、飛鳥寺西門・西面大垣と西方の遺構



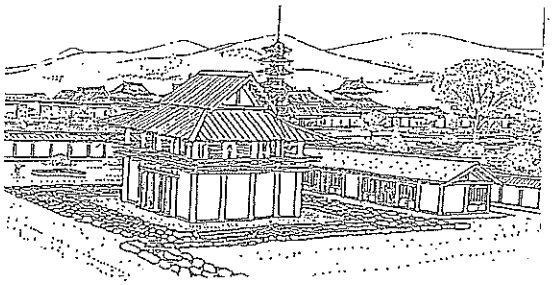
8、石組溝と土管暗渠



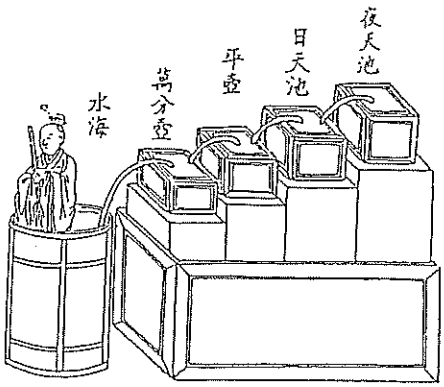
9、土管暗渠



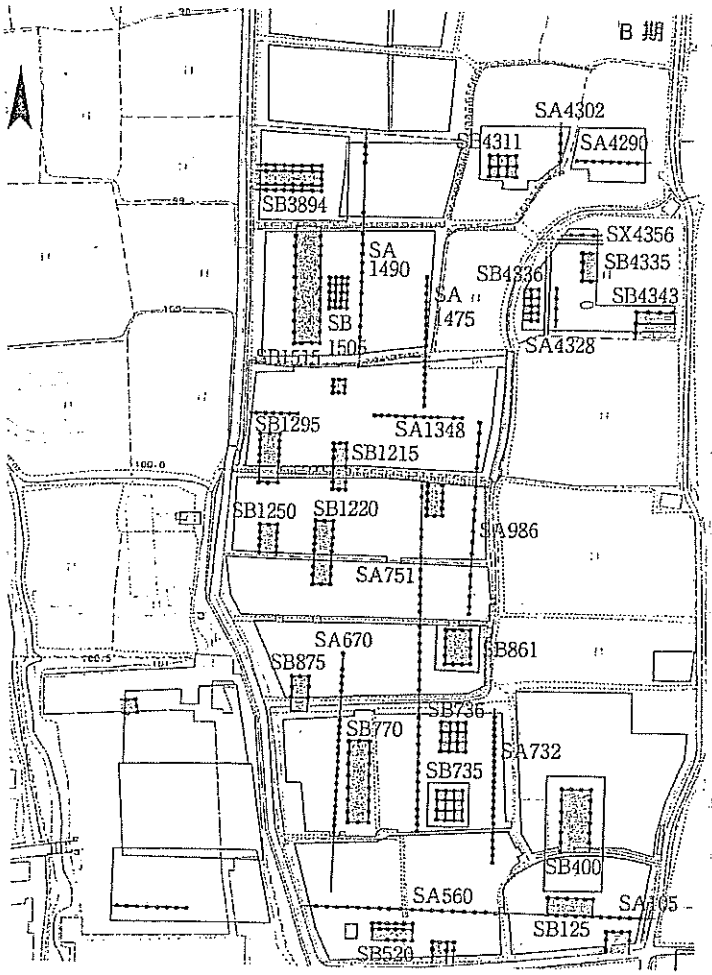
1、石神遺跡と水落遺跡(斉明朝)



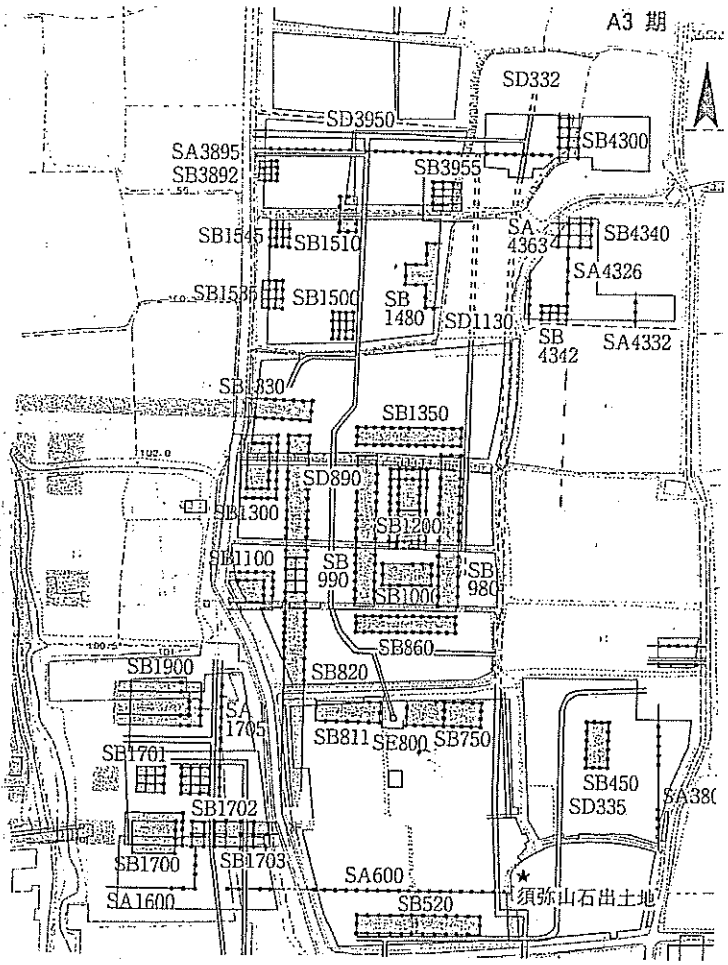
2、水時計台・飛鳥寺・槻樹



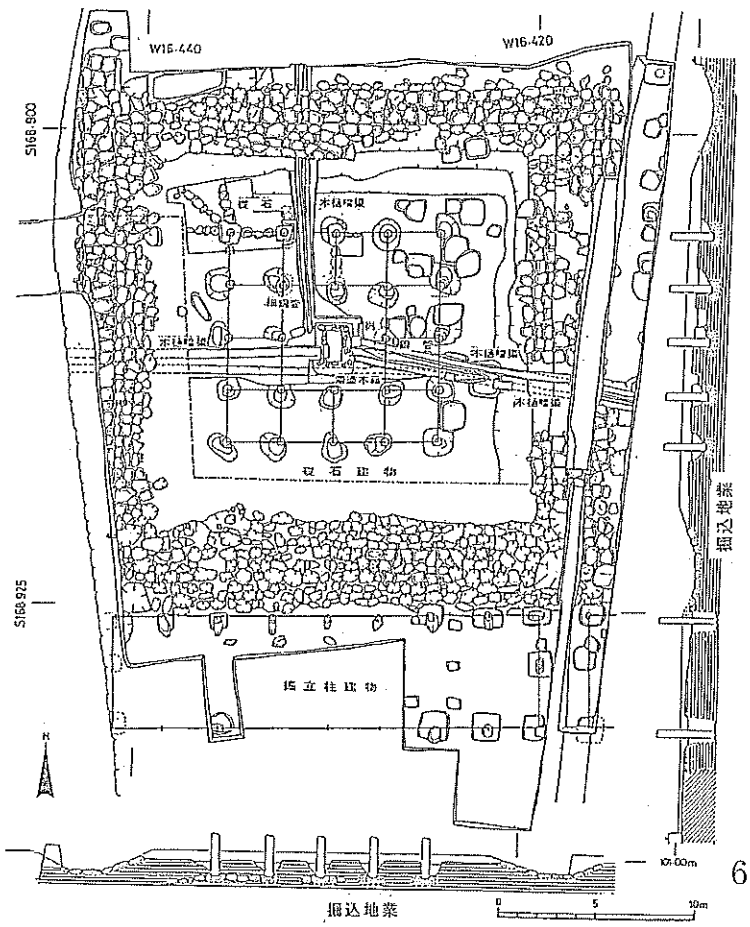
3、唐・呂才の水時計



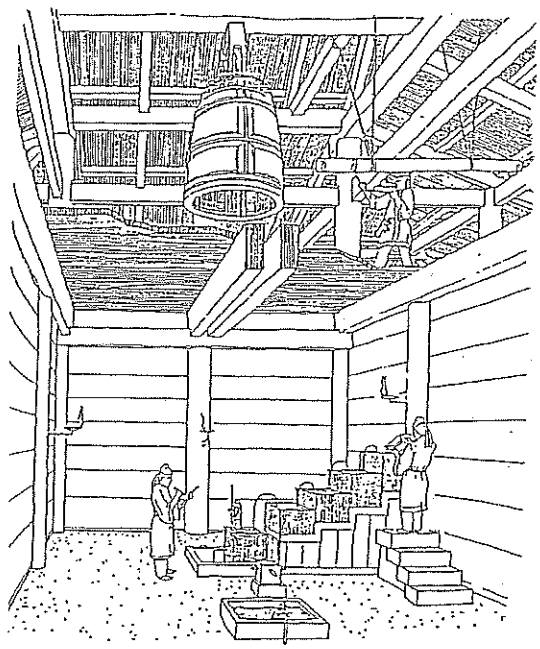
5、石神遺跡の遺構群(天武朝)



4、石神遺跡の遺構群(斉明朝)



6、水落遺跡の水時計と水時計台跡



7、水時計台内部の復原